九州大学ソーシャルアートラボ アートマネジメント人材育成事業
2019年度活動報告書

アート活動を通した“共に生きる社会”の創造 2

Social Art Lab 2019

アート活動を通した“共に生きる社会”の創造 2

九州大学ソーシャルアートラボ
アートマネジメント人材育成事業
2019年度 活動報告書

Contents

ごあいさつ …… 2
九州大学ソーシャルアートラボ（SAL）2019年度の活動 …… 3
九州大学ソーシャルアートラボの概要 …… 4

実践講座 …… 5
九州北部豪雨災害復興支援プロジェクト …… 6
「演劇と社会包摂」制作実践講座 …… 14
奥八女芸農プロジェクト …… 22

公開講座 …… 32

教材開発 …… 37
ハンドブック作成 …… 39
人材育成モデル検討会 …… 42
公開ディスカッション …… 43

2019年度事業フライヤー一覧 …… 45
メディア掲載 …… 46
おわりに …… 48

ごあいさつ

平成27（2015）年度に大学院芸術工学研究院に設置されたソーシャルアートラボ（SAL）は、社会の課題にコミットし、人間どうしの新しいつながりを生み出す芸術実践を「ソーシャルアート」と捉え、その研究・教育・実践・提言を通じて、新しい生の価値を提示していくことを目的としています。

SALは平成30（2018）年度から、文化庁「大学における文化芸術推進事業」の助成を受けて、さまざまな講座を開講しています。「社会包摂に資する共創的芸術活動のデザインと人材育成プログラムの構築」と題するこの事業は、①調査研究を通じた教材開発（知見の体系化）、②実践的な教育機会の提供（ノウハウの体系化）、③周知・普及（ネットワーキング）の3つを往還的に実施し、2020年以降の社会で文化芸術を牽引するアートマネジメント人材の育成法を確立することを目指しています。

この報告書は、SALのアートマネジメント人材育成グループの2019年度の活動を記録したものです。まず3つの地域で現場からの学びのあり方を模索した実践講座についてご報告いたします。続いて公開講座、さらには文化庁「文化庁と大学・研究機関等との共同研究事業」と連携して実施した教材開発についてもご報告いたします。

本事業への助成を賜りました文化庁、共催団体としてご支援いただいた公益財団法人福岡市文化芸術振興財団、そして本事業にご協力いただいた皆さまに、この場を借りて御礼申し上げます。

令和2（2020）年3月
九州大学大学院芸術工学研究院・研究院長
谷 正和

九州大学ソーシャルアートラボ（SAL）2019年度の活動

中村 美亜（SAL教員・副ラボ長）

「アートと社会包摂」をテーマにした2年目の活動が終了しました。昨年度に引き続き、実践講座としては朝倉市、福岡市、八女市を中心とした3つのプロジェクトを、調査研究としては教材開発、公開講座、人材育成モデル検討会を実施しました。

朝倉市を中心に展開する「九州北部豪雨災害復興支援プロジェクト」では、共星の里と連携した「黒川復興ガーデン」の庭づくりが大きく進展し、災害の被害を受けた旧黒川小学校グラウンドが庭園へと生まれ変わりました。また、被災後の「創造」に関わる各地の支援活動について聞き取り調査を行い、その結果をまとめた冊子『かたり』も刊行されました。

福岡市で開催された「〈演劇と社会包摂〉制作実践講座」では、昨年度に続き、認定NPO法人ニコちゃんの会と連携し、表現とケアの関わりを学ぶワークショップやフォーラムを実施しました。門限ズのメンバーを招いてのワークショップでは、障害のある人たちとの街歩きを実施し、そこで体感したさまざまな「障害（バリア）」をもとにした表現の創作にも取り組みました。

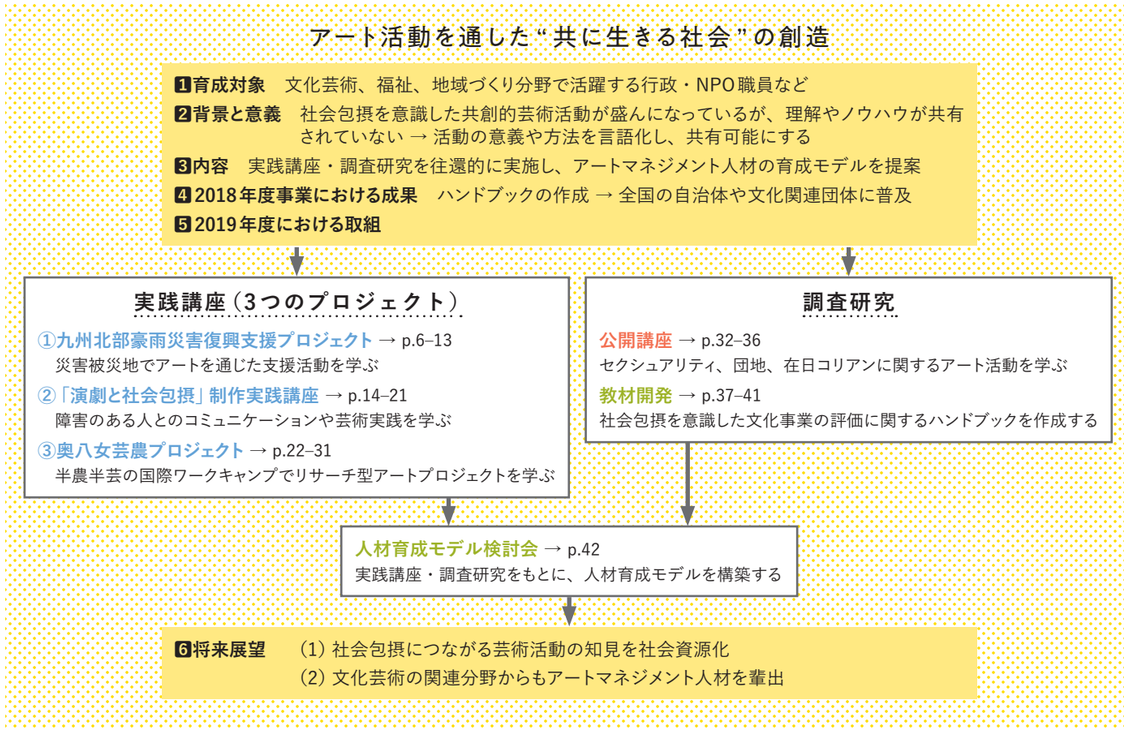
八女市黒木町笠原で、NPO法人山村塾と共同開催している「奥八女芸農プロジェクト」では、昨年度に引き続き、アーティストの武田力さんと外国人ワークキャンプメンバーによる50日間の「半農半芸」ワークキャンプを実施しました。地域でのリサーチを通じて創作した《八女茶山おどり》は地元の人たちを招いて開かれた発表会で好評を博し、地元の秋祭りでも披露されることになりました。

調査研究としては、昨年度に刊行した『はじめての“社会包摂×文化芸術”ハンドブック』の続編となる『評価からみる“社会包摂×文化芸術”ハンドブック』を作成しました。関係者へのインタビューなどの調査研究に基づき、文化庁との共同研究会を7回に渡って実施したほか、意見交換の場として公開の研究会を2回行いました。

公開講座では、HIV/AIDSとセクシュアル・マイノリティの問題を掘り下げたダムタイプのパフォーマンス《S/N》（記録映像）、高齢化する団地での取手アートプロジェクトの取り組み、在日コリアンの音楽家たちの生き様を描いたドキュメンタリーの3つを取り上げました。

さらに今年度は、ソーシャルアートラボの月例会議で、社会包摂を意識したアートプロジェクトを推進するアートマネジメント人材の育成モデルについても検討を重ねてきました。

最終年度となる次年度に向けて、大きな手応えを感じる1年でした。本報告書にて、その活動の詳細をご紹介いたします。



九州大学ソーシャルアートラボの概要

ソーシャルアートラボは、2015年４月に九州大学大学院芸術工学研究院の附属組織として誕生し、
さまざまな活動を展開しています。

理念

ソーシャルアートラボは、社会の課題にコミットし、人間どうしの新しいつながりを生み出す芸術実践を「ソーシャルアート」と捉え、その研究・教育・実践・提言を通じて、新しい「生」の価値を提示していくことを目的とします*。なお、ここでは「アート」を美術分野に限定せず、広義の芸術を示す総称として用い、作品という側面だけでなく実践的側面も重視しながら、環境デザイン、テクノロジー、マネジメントの観点からの総合的アプローチを試みます。

*英語では、socially engaged art, social practice art などと呼ばれています。

背景

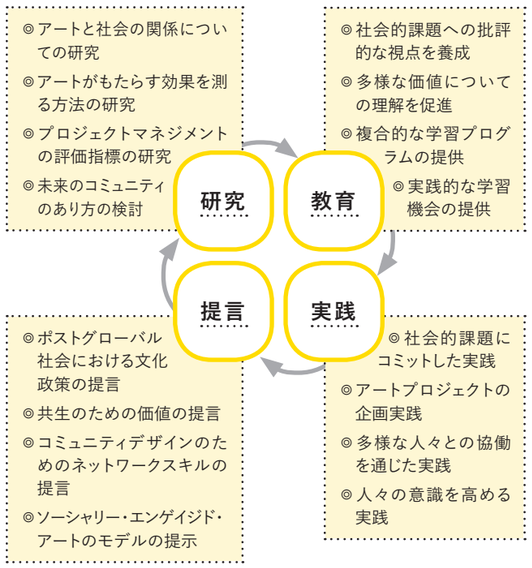
近代以降、技術に裏打ちされた表現としてのアートは、宗教的呪縛から逃れるため、伝統的な共同体社会規範から解放されるため、政治や商業主義から一線を画すため、個人の内面にかかわる、社会生活から自律したものとして存在してきました。しかし、理性と感性、公と私が切り離され、科学のみでは解決されない社会的課題が山積する今日においては、むしろ人間の内面と外の世界の行き来を可能にするものとして、人と人の関係性を再構築するものとしてアートが必要とされています。

指針

ソーシャルアートラボは、「“面白い”を形にし、“豊かさ”を見える化する」をキャッチフレーズに、さまざまな異なるものどうしのデモクラティック（民主的）な交流を通して、ポストグローバル時代を見据えた社会のデザインを考案することを目指します。

ミッション

科学と理性だけでは解決困難な社会的課題に対して、アートを用いて解決へと導く方法に関する研究・教育・実践・提言を、学際的共同作業を通じて行います。つねに学内外での研究成果に基づく教育・実践・提言という流れを意識し、社会的実装を目指します。作品制作やイベント運営においては、単にイベントを実施するだけでなく、記録・編集を含めた一連の流れを意識することで、研究成果への還元や広報発信に注力します。



書籍
『ソーシャルアートラボ――地域と社会をひらく』
九州大学ソーシャルアートラボ 編

平成27〜29（2015〜17）年度事業の総括として、ラボに関わった大学内外の研究者、アーティストなど18人による論考、エッセイ、インタビューをまとめ、書籍化しました。

2018年７月18日初版発行
A5版、240ページ
水曜社　2,500円＋税

実践講座

朝倉市、福岡市、八女市を中心とした３つのプロジェクト

実践講座❶

九州北部豪雨災害復興支援プロジェクト

黒川復興ガーデンとバイオアート―英彦山修験道と禅に習う―

共催：共星の里　後援：九州大学災害復興支援団、朝倉市

左）9月のワークショップで、植樹を終えた後の共星の里の庭の様子（2019年9月撮影）
撮影：長野 聡史

中）プロジェクトの舞台となった黒川にある共星の里の庭。写真はプロジェクトを手掛ける前の庭の様子（2018年7月撮影）

右）2017年7月災害直後の共星の里

SALでは、2018年度から九州北部豪雨災害復興支援プロジェクト「黒川復興ガーデンとバイオアート―英彦山修験道と禅に習う―」を展開しています。

この活動は、2017年に発生した九州北部豪雨で被災された方々や環境に寄り添い、復興に寄与することを目指し、朝倉市黒川にある廃校利用の美術館・共星の里の野外スペースに復興ガーデンを制作するプロジェクトです。一般公募による参加者と共に「復興の庭」を企画、デザイン、実働しながら共創する実践講座の形をとっています。特に「復興ガーデンを創造するプロセスを通して参加者が感じ学んだことを、いかに主体的な行動に結びつけていくか」という人材育成の側面を重要視しています。

近年、日本全国で豪雨や台風などの大規模自然災害が頻発し、災害による深刻な影響が持続する傾向にあります。世界各地でも、さまざまな大規模自然災害が発生しています。災害によって、今まで住んでいた家に住めなくなる人。今までやっていた仕事ができなくなる人。住む人が一気に少なくなる地域。それらによる精神的・経済的なダメージ、コミュニティの分断は非常に大きなものです。

このような状況をふまえ、被災地の復興支援に、アートの力はどのように寄与できるのでしょうか？

2019年度は、2017年7月の豪雨発生から2年目となる年でした。大規模な自然災害が発生した場合、その直後の「復旧期」には、全国から多数のボランティアの方々が現地入りし、家屋の泥出しなどの復旧作業に尽力されます。やがて、復旧作業がある程度進んだ後は、メディアで報道される機会も激減します。しかし、現地で暮らしている当事者の方々は、そこからの長い「復興期」を生きてゆかねばならないのです。2017年九州北部豪雨の被災地は、もともと過疎化が進んでいたうえ、災害によって現地の居住者が更に減少したため、復興の担い手となる人材の不足という課題を抱えています。

そこで、当プロジェクトの柱の一つとして「関係人口を増やすこと」が挙げられます。「関係人口」とは、「定住人口」でもなく、観光に来た「交流人口」でもない、地域と多様に関わる人々の人口のことです。

プロジェクト1年目である2018年度はまず、現地視察研修、復興ガーデン創造のためのアイデア作りから始めました。2年目である今年度は、そのアイデアに基づいての庭づくりワークショップ、また、被災地で創造的な活動をしている団体を紹介する小冊子の制作を行いました。

「知らなかった地域」が、「関心ある地域」に。さらに、「愛着を感じる地域」に。プロジェクトの実践を通して、参加者たちが学びを深めています。

Contents

1 九州北部豪雨災害
復興支援団体紹介小冊子“かたり”

2 風と水と土の道・再生のための
庭づくりワークショップvol.1
9月11日（水）土壌改良と枯山水づくり
9月12日（木）石周りの造作と植樹
⇓

3 風と水と土の道・再生のための
庭づくりワークショップvol.2
東屋セルフビルドと植栽ワークショップ
3月5日（木）東屋の建前作業／剪定と植栽
3月6日（金）東屋の土間三和土作業

〉2018年度の振り返り〈

2018年7月1日に、「現場に立ち、感じることから始めること」を目的に、現地研修「復興支援のための視察研修」を行いました。豪雨がもたらした大量の流木や巨石を見たり触れたりし、災害の大きさを感じました。また、現地の方々から「強い雨の音や雷鳴を聞くと、災害発生の日のことを思い出して不安になる」という話をうかがい、被災地の方々の気持ちを知るための学びの機会を得ました。

10月26日には庭園デザイナーとして有名な枡野俊明先生に「禅の庭の根本概念」の講義をいただき、日本庭園作りの基本や、庭に石を使うに当たっての知識を学びました。その後、復興ガーデン作庭のアイデア出しを行いました。

11月10日、作庭アイデアのブラッシュアップと、「作った庭に、どんな人が来てほしいか？庭で、どんなことをしたいか」の企画提案をする話し合いを行いました。

3回に渡ったこの実践講座で、豪雨被災地域居住または出身の参加者と、地域外からの参加者が、共に被災地のことを真剣に考えながら「庭園作りというアート活動を通しての復興支援」について学びました。

↖ 現地視察研修で、根っこごと流された巨大な被災木を実際に見て説明を受けました

← 共星の里に流れ着いた石を庭作りにどう生かせるか考え、作庭アイデアを練りました

↑ 作庭アイデアと、庭の使い方の企画提案について、真剣に話し合いを重ねました

撮影（左下、右）：長野 聡史

① 九州北部豪雨災害 復興支援団体紹介小冊子“かたり”

A4変形、50ページ
※PDF版は、次のURLでダウンロードすることができます。
http://www.sal.design.kyushu-u.ac.jp/pdf/2019katari.pdf

メディアでの報道も減り、地域外からの関心も薄れてしまう、災害発生から2年目の時期。そのような被災地において、災害発生から復興支援活動をたゆまず継続している人物や団体は、どのような思いを持って、どのような活動をしているのでしょうか。

その軌跡を紹介する冊子をまとめようと、大学生や社会人の有志16人で「編集部」を結成しました。取材のために何度も現地へ足を運び、創造的な活動をしている21団体27名へのインタビュー調査を行い、編集・校正を重ね、9月末、『九州北部豪雨災害 復興支援団体紹介小冊子“かたり”』が完成。SALのウェブサイト上でPDF版を公開し、印刷した冊子を朝倉市役所、道の駅、あさくら観光協会などに設置しました。

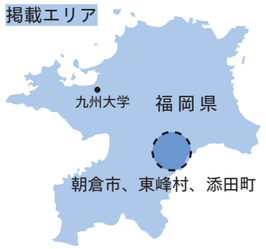
編集部として参加したメンバーからは、「フォーラム開催やパフォーマンスなどでの支援は、その時その場でしか味わえない空気感や出会いを提供できるという特長がある。一方、冊子制作という形での支援は、完成した冊子が、いわば歩き出していくようなもの。特定の場所や時間に縛られず、冊子が多くの人の手元まで出向いて、被災地の内外を結ぶネットワーク作りに役立ってくれる」という感想が聞かれました。

この冊子を見た一般社団法人福岡青年会議所の皆さんが「自分たちも災害が発生した際に迅速に動けるよう、平時からシミュレーションを行おう」と、早速自主的に企画を立ち上げるという動きがありました。（p.12参照）

制作プロセス

4月	発案
4〜6月	取材
7〜8月	執筆
8〜9月	デザイン・校正
9月末	発行

掲載エリア



編集部
知足 美加子（SAL教員）［本冊子監修・執筆］
白水 祐樹（SALスタッフ）［マネージメント・執筆］
川口 理恵（アグリガーデンスクール&アカデミー福岡朝倉校スタッフ）［執筆］
永松 美和（元バレエ講師）［執筆］
松本 亜樹（いとしま菜の花プロジェクト／あさ・くる代表）［執筆］
師岡 知弘（高木薪づくりプロジェクト／黒川みらい会議代表）
伊藤 洋子（神楽舞手）
密岡 稜大（九州大学大学院学生）［取材書記・執筆］
町野 陽子（九州大学学生）［執筆］
永松 京（西南学院大学学生）［執筆補助］
取材補助：藤原 旅人（SALスタッフ）、鄒薛 松武・田中 圭太郎（九州大学大学院学生）、口羽 雅晴・逆瀬川 陽介・嘉松 峻矢・土井 康平・山中 りり花（九州大学学生）
デザイン・写真（一部）：田中 里佳
後援：九州大学災害復興支援団、朝倉市、東峰村、添田町

Behind the scene ―取材中の様子―

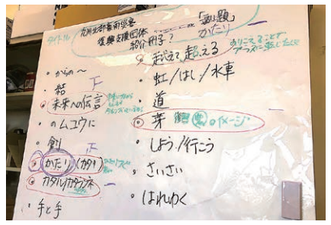
4月22日　聞き取り調査
［朝倉市・あさくら観光協会］
1回目の取材先は、あさくら観光協会の里川径一さん、朝倉市役所商工観光課の隈部敏明さん。被災流木で作られた「朝倉ウッドキャンドル」を持って。

5月14日　聞き取り調査
［九州大学大橋キャンパス］
公益社団法人朝倉青年会議所の天野茂晃さんにインタビュー。非常時におけるマネジメントの知恵や、平時から備えておくべき対策など、貴重なお話が満載でした。

5月21日　聞き取り調査
［朝倉市黒川宮園地区］
宮園たんぽぽの会の宮崎幹子さんが、ご自宅の庭の東屋で、ご主人と一緒にお話しくださいました。この日から、SAL関係者と学生に加え、社会人メンバーも同行するようになりました。

6月11日　聞き取り調査
［朝倉市・共星の里］
共星の里の柳和暢さん、尾藤悦子さん、JRVCチーム「螢火（ほたるび）」の岩佐憲一郎さん、伊藤リカさんにお話をうかがいました。

6月19日　聞き取り調査
［添田町・道の駅歓遊舎ひこさん］
英彦山地域デザインLLPの加藤憲司さん、川畑裕己さん。「僕たち、前向きですから！」と終始明るい笑顔で話される姿が印象的でした。



8月7日　編集会議
［九州大学大橋キャンパス］
小冊子のタイトル決めの議論。『未来への伝言』などの候補が挙がる中、「語り継ぐ」の意味と「かたる（“参加する”という方言）」の意味を持たせて『かたり』に最終決定。

〉編集に携わって―編集メンバーからの感想―〈

永松 美和（ながまつ みわ）
元バレエ講師

旧友である知足先生に誘われて、SALの活動に参加するようになりました。仕事と子育てが一段落した時期に、自分にとって最も苦手な分野である知的作業に身を置くことは、貴重な機会だと感じています。編集部のメンバーは、仕事でも家族でもない絶妙な距離感の人たち。そうした仲間と共同作業をする時の新鮮な感覚は、参加したからこそ得られたものでした。

記事の編集作業に取りかかった時、最初は緊張と戸惑いでいっぱいだったのですが、先生方にサポートされて頑張ることができました。挑戦して良かったです。

復興支援は「継続」が大切ということを知りました。被災地の支援に、これからも私なりに関われたら良いなと思っています。

密岡 稜大（みつおか りょうた）
九州大学大学院芸術工学府修士1年

聞き取り調査で被災地を訪れた時、災害発生から2年を経ても山の崩落の跡が生々しく残っていることに驚きました。そんな中、地元の方々は皆さん本当に生き生きとしていて、関わっていく中でリスペクト（尊敬）の気持ちが生まれていきました。福岡生まれでない私にとって今まで何も縁のなかった土地が、新しいふるさとになった気がしました。現地のおすすめスポットを知人に勧めることもできるようになりました。

記事を4つ執筆しましたが、現地で聞き取りしたことを記事にまとめる際、被災地の方々の気持ちを脚色なく文字にするのが大変でした。その経験のお陰で、「一つの文章に脚色なくまとめる」というスキルは身についたと思います。

町野 陽子（まちの ようこ）
九州大学芸術工学部4年

聞き取り調査をする中で、「現地に入らないと分からない情報が多いな」と気づきました。朝倉の記事を2つ担当した執筆作業では、伝えたい情報が多くて取捨選択が大変でしたが、執筆を通して自分の考えや思いも整理できました。『かたり』発行後、道の駅などで冊子を手に取った方々からの反響が大きかったと聞き、自分の関わったプロジェクトが誰かのためになっていることを実感できて嬉しかったです。

冊子制作に携わったことで、自分と朝倉というフィールドとの縁を感じ、卒業研究のテーマを復興支援に固めました。研究でも朝倉に入ることになった際、『かたり』のインタビュー先の方々に再度協力を仰ぐことができ、人の縁に助けられました。

② 九州北部豪雨災害復興支援

風と水と土の道・再生のための庭づくりワークショップvol.1

9月11日（水）土壌改良と枯山水づくり
9月12日（木）石周りの造作と植樹

今年度は「苗木を植える」のがメインの一つ。今回行った植栽は、九州大学芸術工学部の学生4名が考案・計画しました。日本庭園の植栽の基礎を学び、7月の現地調査。植樹後の四季の想像図をCGで作り、実や葉の色彩バランスを分析しました。そのアイデアを基に、ヤマザクラ、モミジ、ツバキ、ハクウンボクなど17種類の苗木が用意されました。

そしてワークショップ当日。9月とは思えない強烈な陽射しと暑さの中、参加者たちは各人の得意分野を活かし、木材チップ作り、校庭のフェンス周りのツタや伸びた樹の枝の剪定、土壌改良のための側溝掘りなど、適材適所での分業で作業を行いました。

掘った側溝の上を車両が通れるよう強度のある橋を造る作業には、被災家屋の廃材を再利用。「悲しいモノ」の象徴であった被災廃材が、「ここに来る人を渡すための橋」へと変わる工程は、単なる「作業」に留まらない深い意味があるように感じられました。

フェンスや石垣のツタの除去をした参加者は「もつれたツタは、力任せに引っ張るより、丁寧に解きほぐす気持ちでやると、うまくいった。まるで人間関係みたい。ツタを取り除いて石垣をよく見た時、いろいろな大きさや形の石がこの状態を保っているんだなぁと気づいた」と語っていました。

植樹は、参加者がそれぞれ好きな苗木を選び、どこに植えるかを考えました。

2日目の野外作業が一段落した後、皆で共星の里の講堂に集まり、振り返りを行いました。

1 被災家屋の廃材を手運びし、技術サポーターたちが番線（工事用の針金）で木材を結合。

2 橋が完成。車椅子の方や、共星の里へ美術品を搬入するトラックが通っても大丈夫です。

3 たくさんある苗木の中から自分の気に入った苗木を選び、どこに植えるかを思案。

6 苗木を植え、支柱を立てた後、流木で作った木材チップを敷いて地面を保養しました。

5 参加した大学院生から「植樹って、“植えて終わり”ではない。木を植えると、未来を考える」との言葉も聞かれました。

4 「森林水土保全を学んでいます。この木の成長を見に、また日本へ来たいです」と話す、インドネシアからの留学生。

ワークショップvol.1の振り返りより

流木で木材チップ作りをしました。庭に敷かれて、また土に還っていくと良いな。被災地には、まだまだ大量の流木や風倒木が残っているが、「ただ邪魔な物」じゃないんだ。新しい命を育ててくれる循環になればいいな。

社会人

フェンスに絡まったツタを取り除くと、今までは見えなかった空が見えました。ちょうどフェンスの上にいたカマキリと目が合って、「空が青いね」と会話してるような気分でした。

社会人

何カ月も掛けて植栽の計画をしてきました。今まで頭の中で考えてきたことが、ついに実現して嬉しい。苗木に手を触れながら植えていると、愛着が湧く。ふと気づいたら、苗木に声を掛けていました。

九州大学芸術工学部 学生

講師プロフィール

坂本 浩人（さかもと ひろと）
石彫家・狐谷石器代表
武蔵野美術大学造形学部彫刻学科卒。福岡教育大学非常勤講師。インド、イタリアなど国際美術展参加多数。パブリックコレクション《ザトウくじらのモニュメント》ほか。

柳 和暢（やなぎ かずのぶ）
現代美術作家・共星の里アートディレクター
1971年に渡米し、30年間をサンフランシスコで過ごす。国内外で個展やライブペインティングを行うほか、音楽家・喜多郎のライブツアーやアルバムジャケットのアートワークを手掛けるなど幅広く活動する。2000年より共星の里のアートディレクターとして企画・運営に携わる。

知足 美加子（ともたり みかこ）
SAL教員
九州大学教授、博士（芸術学）、彫刻家（国画会会員）、山岳修験道学会評議員（英彦山山伏「知足院」の子孫）、九州大学災害復興支援団。1999年よりアートプロジェクトおよび復興支援活動を行い、九州北部豪雨災害（2017年）では被災木を活かした彫刻や菜を制作した。

参加者：19名（両日とも）
会場：共星の里 黒川INN美術館
時間：11日13:00〜16:30、12日10:30〜16:30
参加費：無料
技術サポーター：泉田 寿裕（泉田商店代表）、脇 大志（大工）、田中 一成（田主丸グリーンセンター代表）
スタッフ：村谷 つかさ（SAL学術研究員）、白水 祐樹・藤原 旅人（SALスタッフ）

撮影（P10-11※プロフィール写真以外すべて）：長野 聡史

九州北部豪雨災害復興支援
風と水と土の道・再生のための
庭づくりワークショップvol.2

東屋（あずまや）セルフビルドと植栽ワークショップ

3月5日（木）東屋の建前作業／剪定（せんてい）と植栽
3月6日（金）東屋の土間三和土（たたき）作業

3月のワークショップでは、地域内外の方々が憩うことのできる「東屋」を、被災木によってセルフビルドしました。木材に触れ、木の香りを感じながら作業を進める中で、この杉が植えられ、育てられ、そして被災木となって、今また東屋に活かされている歴史に思いを巡らせました。

また、校庭の木々の剪定と、草花の植栽を実施しました。当初は一般からの受講生を募集し、多くの方々に応募いただきましたが、新型コロナウイルスに関する対応により、SAL教員・スタッフや協働団体、ならびに関係者による作業を行いました。

会場：共星の里 黒川INN美術館
時間：両日とも10:30〜16:30
技術サポーター：池上 一則（大工池上算規代表）、田中 一成（田主丸グリーンセンター代表）、八尋 晋（彫刻家）
スタッフ：白水 祐樹・眞﨑 一美（SALスタッフ）

講師

杉岡 世邦（すぎおか としくに）
有限会社杉岡製材所代表取締役社長

柳 和暢（やなぎ かずのぶ）
現代美術作家・共星の里アートディレクター

知足 美加子（ともたり みかこ）
SAL教員

撮影（2点とも）：長野 聡史

〉関連企画〈

今年度のプロジェクトがきっかけとなり、生まれた企画をご紹介します。

福岡青年会議所JC シンポジウム「朝倉のあの日と今」

福岡青年会議所主催で復興シンポジウムが開かれ、「朝倉の当時と現状について」「被災してこの2年間の具体的支援について」「対外から、今後教訓を活かすためにできる事について」の3つの講演会に加え、防災体験型シミュレーションが行われました。ハザードマップを見ながら災害発生時の避難場所を確認、実際にその場で家族に電話をかけて安否確認シミュレーション、ロープワーク、要救護者の搬送、炊き出しなど、臨場感のある実用的な訓練がなされました。各地域の防災意識を高める上での好例となる取り組みでした。

参加者：141人　日時：12月3日（火）19:30〜21:30（19:00受付）
会場：九州大学大橋キャンパス5号館511教室
参加費：250円（軽食費含む）　主催：福岡青年会議所

九州大学学生による復興支援 アートパフォーマンス《共生（ともいき） -tomoiki-》

九州大学芸術工学部の学生4人が企画し、共星の里にてアートパフォーマンス《共生（ともいき）》が行われました。学生の作曲・演奏した音楽に合わせ、イチョウや岩石にプロジェクター5台で光を照射し、パフォーマンスを上演。被災地の自然や人々の痛みが癒され、新しい命として再生する物語が、光と演者によって表現されていました。地元住民を中心に20人ほどが観覧に集まり、公演後、口々に好評の感想の声と、学生たちへの労いの言葉が聞かれました。

参加（観覧）者：約20人　日時：12月28日（土）18:30〜18:35頃
会場：共星の里 黒川INN美術館　参加費：無料
企画：口羽 雅晴・山中 りり花・逆瀬川 陽介・國弘 暉（九州大学学生）

アートとしての庭の共創

知足 美加子（SAL教員）

豪雨被災地の土砂の前で茫然としたあの日から、「いつかここが命を思う美しい場として再生する」と、心に描いてきました。アートは、自然からの呼びかけから生まれることが多く、その究極の形は「ガーデン」ではないかと思います。日々変化する自然界と人間の心が調和する場を共創し、自然と人間、人間同士のつながりを紡ぎ続けるからです。

本年度は、その「復興ガーデン」が現実化した1年でした。朝倉市黒川地区住民は、災害後100世帯から20世帯に激減しています。私は、離村者の一時的な帰村経験を担保し、また地域外からの「関係人口」を増やす場づくりの必要性を感じていました。強制的ではなく、そこにある美しさ、喜ばしさに浸るために立ち寄りたくなる場。地域外からの意識継続のために、関心をつなぎとめる何らかの仕組み。それらを実現するあの日のビジョンが、「アートとしての庭の共創」だったのです。

災害時、共星の里（旧黒川小学校）には大量の土砂や岩石が流れ込んだため、多くの樹木が弱り、枯死しています。災害岩石を活かし、樹木を再生（土壌改良して植樹）することを目指す時、学ぶべきものは「禅」の庭でした。禅僧の作庭家・枡野俊明先生を招き、共星の里で造園案を練ったのは昨年度のことです。本年度はまず、複数の企画案について地域住民の方々に意見を聞くところから始まりました。アンケートには、養蜂を始めたいという夢や、植樹したい花木などが記されていました。それらをもとに、九州大学学生と植生計画と庭案を作成しました。

9月から本格的に庭づくりに取り組みました。被災した住宅廃材を消炭に変え、土壌改良と鎮魂につなげました。側溝づくり、剪定、岩石のレイアウトを行い、最後に参加者それぞれが未来を思いながら植樹しました。身体を通したこれらの活動は、参加者の意識に「被災地への想像力を喚起する何か」を刻みました。そこに植えた自分の木から、被災地を感じるような感覚です。翌年3月には、災害木による東屋を制作し、花の植栽を行いました。

庭づくりと並行して行ったのは、復興支援団体紹介小冊子『かたり』の制作です。地域内外の相互理解と意識継続、「支え合いの輪」が広がることを願うものです。実際にこの冊子が契機となり、福岡青年会議所（JC）が行動を起こしています。

また、復興ガーデンを舞台にした、学生たちによるアート活動も生まれています。庭の岩石や樹にプロジェクションマッピングし、パフォーマンスを行うものです。年末の寒い夜の公演にもかかわらず、被災地の方々が集まってくださいました。庭にさまざまな光が満ち、アートによって一つになった心が、解放されたひと時でした。

庭は、命ある自然物が成長し循環しながら、日々変化を刻むアートです。今後この庭で表現によって交流する「喫茶養生会」を開きたいと考えています。

光が心に届く時。木がつないでくれる未来

白水 祐樹（SALスタッフ）

9月の庭づくりワークショップの際のこと。共星の里（旧黒川小学校）の校庭のフェンスのツタを取り除き、樹木の枝々の伸びすぎた部分を剪定すると、それまで遮られていた光が、スッと差し込んできました。「わぁ、明るくなって気持ちいいね」と、参加者の皆さんの表情も爽やかになりました。

年末には、同じく共星の里の校庭を舞台に、九州大学芸術工学部の学生たちによるアートパフォーマンスが行われました。ライトアップで闇夜に美しく浮かんだイチョウの大木の姿が、特に好評でした。公演後にイチョウの木の前で、黒川小学校の卒業生の方々が

「この木は元々オスの木だったのを、何十年か前にメスの木を接ぎ木してくれた人がいて、それからギンナンが採れるようになって……」

と、思い出を楽しそうに語り合っていました。地元の方々にとって、この木は精神的支柱なのです。この夜、細い月と、オリオン座などの星々が、寒い空に光っていました。ちなみに「共星の里」という名前には、「一人ひとりが星のように輝いてほしい」という思いが込められていると聞きます。

木洩れ陽の光。ライトアップの光。月や星の光。そして、この山里の自慢であるホタルの光。光が心に届く時、私たちは、癒しを感じたり、元気を得たり、悲しみや寂しさや苦しみから立ち上がって「歩いてゆけそう」と希望を抱けるのではないでしょうか。

東屋づくりに使われた木材は、何十年前、ひょっとすると百年以上前かもしれない昔、その木が太陽の光を浴びて光合成をしていた時の、命の痕跡です。私たちは知らず知らずのうちに、悠久の自然の恩恵と、木を植えて育ててくれた、顔も名前も知らない誰かの恩恵を受けています。

庭づくりワークショップで植樹をした時、参加者の皆さんの心の中にも、「この木を見て、誰かが笑顔になってくれますように」という優しい思いが溢れていたことでしょう。こうした温かい気持ちの連鎖が広がっていくことを願います。

実践講座❷

「演劇と社会包摂」制作実践講座

共催：認定NPO法人ニコちゃんの会、公益財団法人福岡市文化芸術振興財団
後援：福岡市

Contents

① 身体表現ワークショップ「障害からひろがる表現とケア」 6月1日（土）・2日（日）

② フォーラム「障害からひろがる表現とケア：ともに創造するためのはじめの一歩」 7月15日（月・祝）

「演劇と社会包摂」制作実践講座の2年目にあたる今年度は、「障害からひろがる表現とケア」をテーマとし、福祉施設や劇場、学校関係者など、多様な人たちとの活動経験がある人たちやこれからやりたいと思っている人たちを中心に広く公募をしました。そして、実践的なワークショップとフォーラムを通して、多様な身体を持つ人たちが参加する演劇作品の制作現場でのコミュニケーションのあり方や、ケアのあり方などについて知り考える機会としました。

多様な身体を持つ人たちの中には、日常的なケアやサポートが必要な人も含まれ、そのような人にとっては、演劇の制作現場においてもケアやサポートは欠かせません。しかし「そのような時のマネジメントはどのように行えばよいのか」と戸惑うこともあるでしょう。そこで、受講生にとってそのような参加者と向き合いアートマネジメントを行う経験の場となるように、国内外で表現活動を行っている方や日常的にケアやサポートが必要な俳優やダンサーの方を講師に迎え、障害のある人の日常から生まれる表現について考えたり、表現活動を行う上で予想外に起こる「障害」と向き合ったりしながら、現場から気づきを生み出すことを目指しました。

撮影（3点とも）：富永 亜紀子

〉2018年度の振り返り〈

SALでは2018年度より、「演劇と社会包摂」に関するアートマネジメント人材を育成するための制作実践講座を開催しています。2018年度は、オリエンテーション、公開フォーラム、ワークショップを経て、演劇制作の現場にインターンとして稽古から公演までの作品制作に関わりました。さらに、ディスカッションでその体験を振り返るというプロセスを通して、多様な表現を支えるために必要なコト・モノを実践的に学び、受講生自身の活動に活かせるような講座としました。

上）昨年度のフォーラム「わたしたちの舞台はどこにある?」より
下）昨年度のワークショップ「身体で知りあう表現とケアの2日間」の様子

① 身体表現ワークショップ「障害からひろがる表現とケア」

6月1日（土）・2日（日）［2日間］

本講座は、多様な人々と知り合っていくという実体験を通して、受講生が「表現」や「ケア」についてもう一度考え直す2日間となることを目指しました。

講師に、「音楽」「ダンス」「演劇」「マネジメント」という互いのジャンルを越えて、アートの新しい可能性を考えながら活動している異ジャンルコラボバンド「門限ズ」のメンバーの野村誠さん、遠田誠さん、倉品淳子さん、吉野さつきさんと、認定NPO法人ニコちゃんの会代表理事の森山淳子さん、舞台パフォーマーの森裕生さん、俳優の里村歩さんと廣田渓さんを迎えて行いました。

1日目は、講師も受講生も一緒に身体を動かしたり、森さんのレクチャーを行ったり、3グループに分かれて会場の外へ「おでかけ」に行ったりしました。2日目は、里村さんと廣田さんのレクチャーをそれぞれ行った後、みんなで一緒に昼食をとり、その後、会場の外へ「おでかけ」した時のことを各グループで話し合い、ショートパフォーマンスにまとめ、門限ズがアレンジを加えて発表しました。

受講生は、現場から気づきを生み出すという経験を積み、「表現」や「ケア」について知り考えることができたのではないでしょうか。

参加者：1日22名、2日25名
会場：九州大学大橋キャンパス3号館322教室ほか
時間：1日14:00〜18:00（開場13:30）、2日11:00〜16:00（開場10:30）
参加費：無料
スタッフ：池田 万由未・井上 直己・漆山 阿弥・山田 賢祐（認定NPO法人ニコちゃんの会）、村谷 つかさ（SAL学術研究員）、眞﨑 一美（SALスタッフ）、藤原 健司（九州大学大学院学生）、福田 望（九州大学学生）
映像記録：園田 裕美

講師プロフィール

野村 誠（のむら まこと）／ノム（門限ズ）
作曲家・ピアニスト
インドネシアと日本で上演される度に変化するガムラン作品《踊れ！ベートーヴェン》、日英共同の《ホエールトーン・オペラ》、マルチメディア作品《老人ホーム・REMIX》など、分野を横断し人と出会う。

遠田 誠（えんだ まこと）／エンちゃん（門限ズ）
ダンサー・振付家
日常のはざ間にダンスその他諸々を割り込ませた「まことクラヴ」を主宰し、劇場はもとよりアートスペース、商店街、市役所、電車内、空港に至るまで出没し、サイトスペシフィックな活動を展開。

撮影：427FOTO

吉野 さつき（よしの さつき）／めい（門限ズ）
ワークショップコーディネーター・愛知大学文学部教授
公共ホール勤務、英国での研修後、教育、福祉、などの現場でアーティストによるワークショップを数多く企画。アウトリーチ事業やワークショップ等の企画運営を担う人材育成にも各地で携わる。

倉品 淳子（くらしな じゅんこ）／じょほんこ（門限ズ）
俳優・演出家
「劇団山の手事情社」所属。観客参加型演劇、他分野アーティストとの作品作りなど、演劇の可能性を広げる活動も同時に行ってきた。海外での公演も多数。

森 裕生（もり ゆうき）／もりっち
舞台パフォーマー
講演家・プロマジシャン・役者・モデル・ボーカリストといった顔を持つ。先天性脳性麻痺による四肢体幹障害という才能がある。ステージネームは「Mr. Handy」。

里村 歩（さとむら あゆむ）／あゆきち
俳優
生まれつきの障がいではなく、原因不明で突然発症する。2014年より、俳優としての活動を開始。身体的にバラエティあふれる人たちの演劇公演『BUNNA』以降、俳優として継続的に活動している。

廣田 渓（ひろた けい）／ケイ
俳優
筋ジストロフィーにより、身体が徐々に筋力低下していき、10歳で歩けなくなった。2015年に演劇公演『BUNNA』と出合い、表現することに興味を持った。その2年後に、俳優として活動を続けている。

森山 淳子（もりやま じゅんこ）／うんちゃん
認定NPO法人ニコちゃんの会代表理事
認定NPO法人ニコちゃんの会を設立し、非日常的な時間や場づくりを積極的に取り入れ、演劇・身体表現ワークショップなど、福岡市内を中心に企画・実践する。演劇公演『BUNNA』にプロデューサーの立場から携わる。

長津 結一郎（ながつ ゆういちろう）
SAL教員
専門はアートマネジメント、芸術と社会包摂。博士（学術・東京藝術大学）。異なる立場や背景を持つ人々がどのように協働することができるのか、ワークショップの開発や協働の場づくりを題材として研究／実践の双方からアプローチを試みている。

ワークショップ1日目

森 裕生さんによるレクチャー

森さんから、自身の障害について、日頃体調を気遣うためにやっていることなどについてレクチャーをしていただきました。森さんは「障害者が自分らしく自分にしかできないことをやっていくには、それを理解し支えケアしてくれる環境が、うまく循環していかなければできない」「いろいろな障害を持った人と一緒の舞台に立つことが多いが、障害を感じさせない世界観がとても好きなので、その世界観をもっと多くの人と共有したい」と語られました。

森さんは、筋肉や体力の衰えを軽減させるために、毎日、筋肉トレーニングや食事管理を行っているそうです。受講生は、トレーニングメニューや食事の量の多さに驚いていました。また、筋肉が緊張して硬くなっている状態を疑似体験するために、床を押すように両足に力を入れたまま歩いてみたり、森さんの身体を直接触ってみたりしました。受講生は、実体験を通して森さんの身体の状態を知ることができました。

会場の外へ「おでかけ」

3グループに分かれて、1時間程度「おでかけ」に行きました。森さん率いるグループは大橋駅方面へ、里村さん率いるグループは大橋キャンパス内を、廣田さん率いるグループは新幹線高架下を流れる那珂川方面を散歩し、それぞれさまざまな「障害」を共にしながら戻ってきました。

森さんグループ

森さんを2人で支えながら、大橋駅へ向かい、
駅エレベータを使ってみる。
意外と狭いことに気づく。
キャンパスへ戻り、無響室や残響室などをめぐる。
扉に鍵がかかっていたり、扉がとても重かったり
開けるのに苦労する。

里村さんグループ

無響室や残響室、グラウンドなどキャンパス内をめぐる。
道路鋲が障害になり、どうやって先に進むかみんなで考える。
2〜3段の階段も障害になり、車椅子を抱えて通る。
噴水の周りを里村さんが高速で回ってみせる。

廣田さんグループ

那珂川へ向かう途中のお店でおやつを買う。
電動車椅子で川岸へ降りる大変さに気づく。
廣田さんをみんなで抱えて、川へ入ってみる。
廣田さんが、公園入口の狭い車椅子ゲートを
慣れた感じで通ってみせる。

撮影（P16-17すべて）：富永 亜紀子

ワークショップ2日目

里村さんと廣田さんのレクチャーをそれぞれ行った後、楽器を鳴らしながら自由に身体を動かしていきました。その後、全員で一緒に昼食をとり、受講生は食事介助も行いました。昼食後は、「おでかけ」した時のことをショートパフォーマンスにまとめ、さらに門限ズが各グループの演出にアレンジを加えて発表しました。

10:30〜 START
声を出しながら自由に身体を動かしてみる。

10:40〜
里村さんレクチャー
里村さんは「病気を受け止め、悔いなく生きようと思っている」と話し、「みんなも悔いなく生きて」と伝えてくれました。

11:10〜
廣田さんレクチャー
「演劇と出合い、表現せざるを得なくなり、徐々に自分を取り戻したように感じている」と廣田さん。

［里村さんレクチャーより］
自身の障害や日頃思っていることについてお話をうかがいました。里村さんは文字盤でコミュニケーションをとることが多くなっているので、時に面倒くさいと思っていることや、会話がスムーズにできる人をうらやましく思うこと、毎日を悔いのないように生きようと思っていることなどを自分の言葉で伝えてくれました。里村さんの通訳を長津が行いましたが、会場にいた全員が里村さんの言葉に耳を傾けていました。

［廣田さんレクチャーより］
自身の障害と森さんの障害との違いや演劇と出合って変わったことなどについてお話をうかがいました。廣田さんは、校区の小学校から特別支援学校へ転校した時に、自分が終わってしまったように感じ、何も表現しなくなっていったといいます。その後、演劇と出合い、表現せざるを得なくなり、徐々に自分を取り戻していったように感じていると語られました。廣田さんは今までの経験を通して「気づかないうちに自分も他の人も、違いという壁をつくっているんだなぁ」と感じているとも話してくれました。

11:40〜
楽器を鳴らしながら体を動かしたり、
スローモーションで会話をしてみる。

12:30〜 お昼休み
前日と同じ3グループで一緒に食事を取りました。コミュニケーションを取りながら交代で食事の介助を行いました。

13:30〜 作品づくり

廣田さんグループパフォーマンス
「おでかけ」で起きた障害を歌や踊りなどで表現し、川へ入った時の様子を言葉と動きで表現しました。

森さんグループパフォーマンス
重く厚い扉に苦労したことを動きで表現し、残響室の音の伝わり方を叫びと動きで表現しました。

里村さんグループパフォーマンス
噴水の周りを高速で回ったことや、グラウンドを散歩したことを歌と動きで表現しました。

15:40〜 振り返り
受講生自身がこれからどんなことをしていきたいかや、お互い向き合ってコミュニケーションを取ることの大切さへの気づきなどを語り合いました。最後に吉野さんから「今後、今日の気づきや出来事を人に伝える機会があると思うが、どういう風に言葉を使うか、言葉を使わずに伝えるか、一度立ち止まって考えることがとても大事」という話がありました。

② フォーラム
「障害からひろがる表現とケア：ともに創造するためのはじめの一歩」

〈日本アートマネジメント学会九州部会 2019年度研究会として開催〉

—

7月15日（月・祝）

本講座は、ともに創造するためのはじめの一歩を踏み出すにはどうすればいいか、参加者とともに考えていく機会としました。

前半はまず、本学教員の中村が、昨年度作成した『はじめての“社会包摂×文化芸術”ハンドブック』を基に、マイノリティとマジョリティが共生する社会を目指すために必要なことなどについて説明をしました。

続いて、身体にバラエティあふれる人たちとの演劇制作における「表現」と「ケア」について、倉品淳子さんと森山淳子さんに、本学教員の長津がお話をうかがいました。障害のある人との表現活動は、健常者だけでは生まれなかった新しい表現に巡り合うことができ、とても面白いことがたくさんある現場で、ケアスタッフも俳優もすべての人たちが、お互いがお互いを支え合う現場である、なども語ってくださいました。

次に、吉野さつきさんより、アートマネジメントの視点から「アートと福祉とケア」の言葉の解説がありました。吉野さんは、アートマネジメントの仕事に対して「人が芸術によって幸せになるためにマネジメントしているのではないか。また、ケアによって人が幸せになることが福祉かも知れない」と話され、また、「『何がケアで何がケアでないのだろう』と立ち止まって問いを巡らせ、できることから一歩一歩やっていくことが大事なのではないか」との提起もされました。

森田かずよさんからは、多くの人を募って創作活動を行う時に考えるべきことを中心にお話しいただきました。作品制作の視点から、ケアを必要としない参加者が、ケアを必要とする参加者の介護者とならないようすることなどについて話される森田さん。最後に「“心”と“人”と“場所”と“続ける”がバリアになる」と提示され、“心”は障害のある人やその家族にとって「障害の有無にかかわらず」などの言葉が入っていないと参加しにくいということ、“人”は共演者やケアスタッフの意識のこと、“場所”はアクセシビリティのこと、“続ける”はとにかく活動を続けることと説明されました。

その後、受講生は3〜4人のグループになり、前半で考えたことなどを話し合い、そこで出た意見をキーワードや質問にして提出しました。

後半は提出されたキーワードや質問を基にフロアディスカッションを行いました。「お互い様のケア」というキーワードについて、「違う専門分野の人（事業所）どうしがお互いに補完し合いながら、プラスになることを考えていくのもケアになるし、関係性を持つために心の隙間を互いに空け合って交流するのもケアではないか」という意見などが出ました。また「芸術による幸せ」というキーワードについて、障害者で俳優活動をしている受講生から「以前は自分にとても自信がなかったが、演劇を始めてありのままの自分でいいと思えるようになった」という話も出ました。登壇者からは「表現に込められたメッセージがいろいろな人の理解につながり、制度が良くなっていくことも幸せの一つ。芸術による幸せも多様だと思う」という意見がありました。

本講座の最後に、森田さんより「障害者は『かわいそう』、あるいは『感動をもたらす存在』などと見られがちだけれども、舞台表現は、その偏見を変えていける力がある。障害者が表現活動をやっていくと、必ず、自分の障害と向き合うことになり、辛いこともたくさんあるけれど、それを越えられると自信が持てるようになる。障害のある人には、もっと芸術と触れ合ってほしい」とのメッセージをいただきました。

受講生は、それぞれの考えや活動を進めていくための多くの気づきを得られたのではないでしょうか。

講師プロフィール

森田 かずよ（もりた かずよ）
ダンサー・俳優・Performance For ALL People.CONVEY主宰

先天性の障害（二分脊椎症・先天性奇形・側湾症）を持って生まれる。18歳より表現の世界へ入り、ある時は義足を身につけ、ある時は車椅子に乗りながら、舞台に立つ。日本の障害者パフォーマーのリーダー的存在の一人として注目されている。

吉野 さつき（よしの さつき）→p.15参照
倉品 淳子（くらしな じゅんこ）→p.15参照
森山 淳子（もりやま じゅんこ）→p.15参照
長津 結一郎（ながつ ゆういちろう）→p.15参照

参加者：95名
会場：九州大学大橋キャンパス デザインコモン1階
時間：14:00〜17:00（開場13:30）　**参加費**：無料
スタッフ：認定NPO法人ニコちゃんの会、（公財）福岡市文化芸術振興財団、村谷 つかさ（SAL学術研究員）、眞﨑 一美・白水 祐樹（SALスタッフ）
UDトーク：川上 里以菜・小松 駿斗（九州大学学生）、堺 浩子
手話通訳：福岡市聴覚障がい者情報センター

essay

「当たり前」の社会包摂へ

文：森山 淳子（認定NPO法人ニコちゃんの会代表理事）

「社会包摂？ 何それ？」。私の最初の印象です。本当は難しい概念なのでしょうが、私にとっての理解は、「当たり前のこと」でした。ただ、この言葉が取りざたされるほど、社会では「当たり前のことではない」ということ。当たり前に変えていくための一つの方法として、SALの取り組みのような実践的研究があると思います。それをお手伝いさせていただけるのは、ニコちゃんの会にとっても有意義な取り組みです。大学とNPOが共に協力し合いながら、コトが起こっていく。これもある一つの社会包摂と言えるのではないでしょうか？

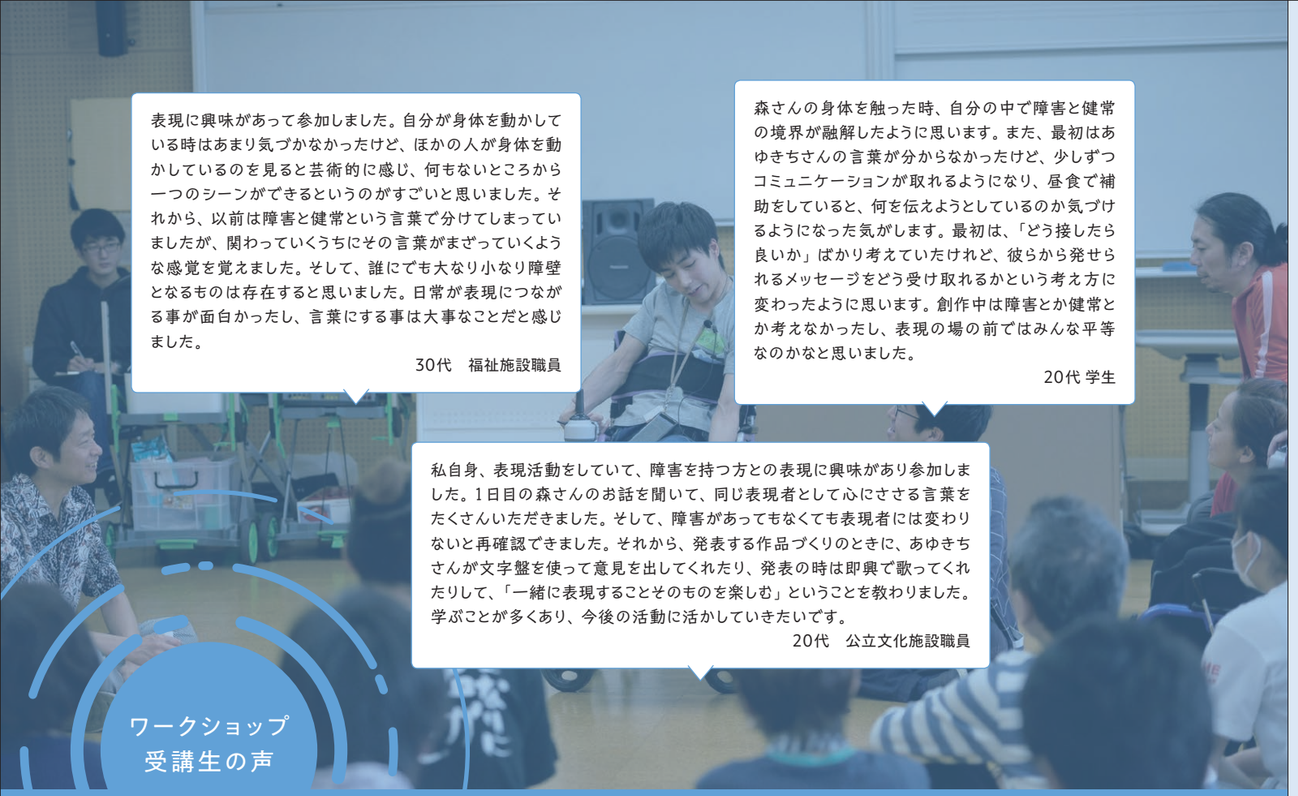
「障害からひろがる表現とケア」のワークショップでも、時間を共有し同じ表現に向かって創作活動をしていく中に、自然にケアが現れてはまた消えていきます。障害のあるなし関係なく、そこに参加していた人すべての人にケアがあったと思います。ほんの少しずつ足りないところを補い合うような、それを活用してより深いものにしていくような。その中にケアが見え隠れしながら進んでいったように思います。ワークショップやフォーラムを通して、それぞれの心に社会包摂という考え方が浸透していればいいなと感じています。そしていつか「当たり前」になり、その言葉を訴えていく必要がなくなることを願ってやみません。

〉関連企画〈　認定NPO法人ニコちゃんの会　すっごい演劇アートプロジェクト「身体的にバラエティあふれる人たちとの演劇のつくりかた」

「縁の下の力持ち」に焦点を当てたワークショップを開催し、さまざまな人たちとの関わりを通じて表現が生まれる現場を体感するとともに、そこにあるケアの役割について考えました。

参加者：5名　**会場**：九州大学大橋キャンパス デザインコモン2階
日時：7月12日（金）18:00〜21:00、13日（土）・14日（日）11:00〜17:00、15日（月・祝）10:00〜13:00
参加費：無料

撮影（P18-19＊プロフィール写真以外すべて）：富永 亜紀子



表現に興味があって参加しました。自分が身体を動かしている時はあまり気づかなかったけど、ほかの人が身体を動かしているのを見ると芸術的に感じ、何もないところから一つのシーンができるというのがすごいと思いました。それから、以前は障害と健常という言葉で分けてしまっていましたが、関わっていくうちにその言葉がまざっていくような感覚を覚えました。そして、誰にでも大なり小なり障壁となるものは存在すると思いました。日常が表現につながる事が面白かったし、言葉にする事は大事なことだと感じました。

30代　福祉施設職員

森さんの身体を触った時、自分の中で障害と健常の境界が融解したように思います。また、最初はあゆきちさんの言葉が分からなかったけど、少しずつコミュニケーションが取れるようになり、昼食で補助をしていると、何を伝えようとしているのか気づけるようになった気がします。最初は、「どう接したら良いか」ばかり考えていたけれど、彼らから発せられるメッセージをどう受け取れるかという考え方に変わったように思います。創作中は障害とか健常とか考えなかったし、表現の場の前ではみんな平等なのかなと思いました。

20代 学生

私自身、表現活動をしていて、障害を持つ方との表現に興味があり参加しました。1日目の森さんのお話を聞いて、同じ表現者として心にささる言葉をたくさんいただきました。そして、障害があってもなくても表現者には変わりないと再確認できました。それから、発表する作品づくりのときに、あゆきちさんが文字盤を使って意見を出してくれたり、発表の時は即興で歌ってくれたりして、「一緒に表現することそのものを楽しむ」ということを教わりました。学ぶことが多くあり、今後の活動に活かしていきたいです。

20代　公立文化施設職員

ワークショップ 受講生の声

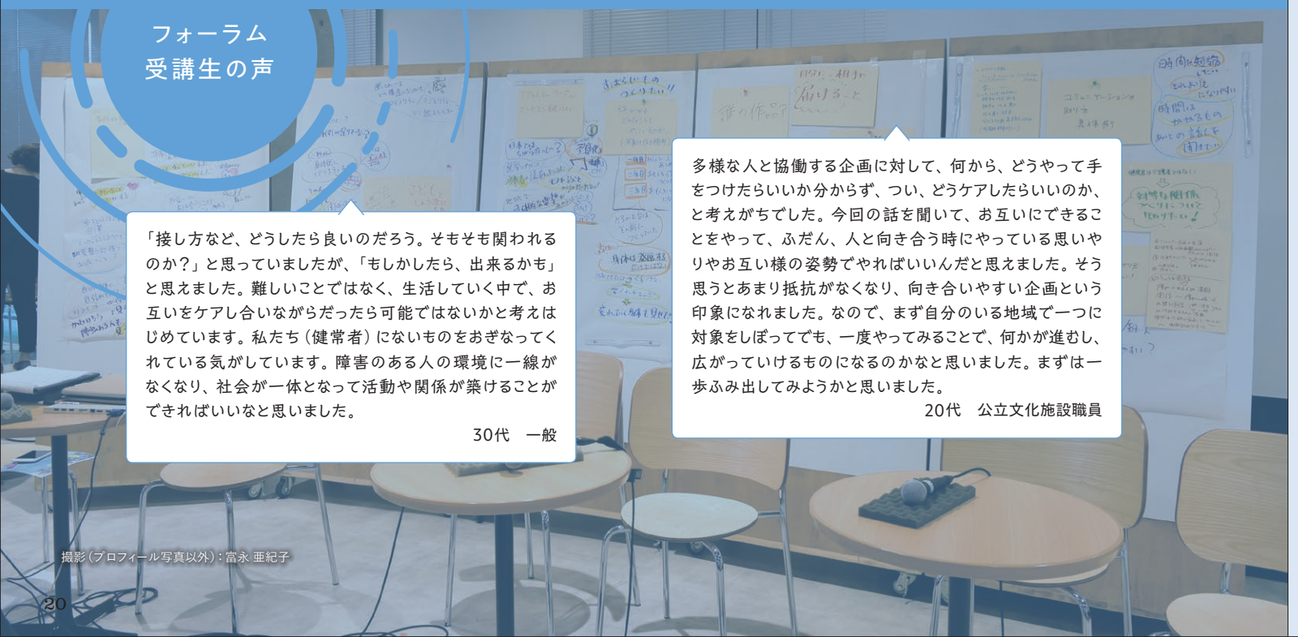
現場からの声
～当日のアンケートより～

門限ズより

表現がひろがる、豊かになるのは、見たことがないものを見て、触れたことがないものに触れた時だと思う。「未知との遭遇」なんて映画が昔あったけれど、表現を通して遭遇するのは未知の誰かだけじゃなくて、その誰かを通して知る未知の自分でもある。もりっち、あゆきち、ケイ、この3人のパフォーマーたちと門限ズの出会いを振り返って、そんなことをふと思いました。2日間の中で、門限ズも彼ら3人のパフォーマーたちも、あの場にいたほかの参加者の皆さんも、そんな体験をしていたのではないでしょうか。
それはとてもワクワクする体験で、まだまだ未知なる表現がそこに潜んでいることの発見でもありました。これからも、彼らと一緒にもっともっとそれを探求していきたいと思っています！

門限ズ めい（吉野 さつき）

フォーラム 受講生の声



「接し方など、どうしたら良いのだろう。そもそも関われるのか？」と思っていましたが、「もしかしたら、出来るかも」と思えました。難しいことではなく、生活していく中で、お互いをケアし合いながらだったら可能ではないかと考えはじめています。私たち（健常者）にないものをおぎなってくれている気がしています。障害のある人の環境に一線がなくなり、社会が一体となって活動や関係が築けることができればいいなと思いました。

30代　一般

多様な人と協働する企画に対して、何から、どうやって手をつけたらいいか分からず、つい、どうケアしたらいいのか、と考えがちでした。今回の話を聞いて、お互いにできることをやって、ふだん、人と向き合う時にやっている思いやりやお互い様の姿勢でやればいいんだと思えました。そう思うとあまり抵抗がなくなり、向き合いやすい企画という印象になれました。なので、まず自分のいる地域で一つに対象をしぼってでも、一度やってみることで、何かが進むし、広がっていけるものになるのかなと思いました。まずは一歩ふみ出してみようかと思いました。

20代　公立文化施設職員

撮影（プロフィール写真以外）：富永 亜紀子

人が幸せになるための気づき

眞﨑 一美（SALスタッフ）

今回の「演劇と社会包摂」制作実践講座は、多様な人たちと演劇作品を制作する際に、現場で直面するコミュニケーションの取り方やケアの方法に戸惑ってしまうという課題について、そこは特殊な介護の現場ではなく、人と人の関係性が生まれる特別な現場として、受講生が自分の現場に置き換えて考え、実践できるように企画しました。

具体的には、ワークショップとフォーラム、どちらも国内外で演劇やダンスの活動をされている方々を講師に迎え、現場目線で受講生どうしや受講生と講師が対話を通して気づきを深めていけるようにしました。特に、身体障害者で身体表現活動をされている森田かずよさん、森裕生さん、里村歩さん、廣田渓さんのお話は、受講生にとってたくさんの問いと気づきがあったと思います。受講生は、自分と違う／違わない、同じ／同じではない、自分は彼女は彼はできる／できないなど、障害の有無に関わらず、それぞれにとって障害となっているモノ・コトを見つめ直し、「障害とはいったい何を指しているのか」悩んだと思います。そして、誰もが持つ個人差として障害を捉え、ありのままに個々と向き合うことで、人と人の関係性が生まれることに気づいたのではないでしょうか。

また、介護の現場では、ケアをする側とされる側という関係で物事が進んでいきますが、人と人の関係性が生まれる表現の現場では、ケアをする側とされる側という関係よりも、お互いにできることをケアしあう「お互い様のケア」で物事が進んでいく場合もあるというお話が吉野さつきさんよりありました。そして、「芸術やケアによって人が幸せになる」「そのためのアートマネジメント」「そのためのケア」というお話もありました。今回の受講生は、福祉関係の施設で働いている方も多くいらっしゃいましたが、ケアのあり方について、リスクマネジメントという考え方だけではなく、人と人の関係性の中から相手を思う気持ちが芽生え、できること／できないことを互いに支え合い始める場をつくることが大事という考え方へ変わるきっかけになったのではないでしょうか。今回のワークショップとフォーラムを通して「障害」「表現」「ケア」についてもう一度考え直してみると、私にもたくさんの気づきがありました。

多様な人々が参加する演劇作品を制作する現場は、ありのままの個人と向き合いながら、人との関係をつくっていく場となる。そのため、障害の有無に関わらず自分自身で乗り越えなければならない障害も多くあり、くじけそうになることがあるかも知れない。しかし、お互いに障害となっているものを乗り越え、つながることができれば、人と人との関係性がひろがり、ありのままの表現とお互い様のケアが社会へひろがっていく。

同じような気づきが、社会のあらゆる場へ、ひろがっていくことを願います。

一人ひとりの異なりに気づく場

長津 結一郎（SAL教員）

私が今年度の講座で印象に残ったシーンは、身体障害のある講師たちのレクチャーでのひとこまです。森裕生さんから、自分の身体に必要以上に力が入ってしまうことや、一つの動作に非常に体力を使うことから、筋力トレーニングを熱心にやっているということが紹介されました。そのうえで、森さんは受講生たちに「自分の身体を触って欲しい」と言い、おもむろに上半身裸になったのです。おそるおそる森さんの身体に触れる受講生たち。するとそれに影響を受け翌日、同じく身体障害のある里村歩さんも、同様のことを受講生に促しました。一方、こちらも身体障害のある廣田渓さんは、身体を触ってもらうということは促しましたが、身体は見せませんでした。廣田さんの場合は逆に、筋肉が衰えていくという症状があるためなのかもしれません。受講生としてこの3人の異なる身体に文字通り「触れる」こと、そのあと一緒に表現をつくることは、「一人ひとりの身体的特性の異なりに気づく」という経験であったのではないかと思います。

昨年度の教材開発事業で私たちは、「社会包摂」に向け、マイノリティのエンパワメントとマジョリティの意識改革が求められている、とまとめました。ただ、この講座を通じ私が改めて考えさせられたのは、エンパワメントと意識改革が立場を超えて絶えず行われる「場」を形成することの重要性です。今回の講座は「一人ひとりの身体的特性の異なりに気づく」ことを契機として、このような「場」が生まれるあり方を示していたようにも思います。

2020年度は、より障害のある人の芸術文化活動が脚光を浴びる1年となるでしょう。ただしそれを一過性のものとしてはいけない、と強く感じています。障害のある人たちの生活の質向上と、障害のある人が優れた表現活動に向け障壁なく活動できる環境づくりに向けて、まだまだ課題は多いです。本講座では次年度も引き続き障害の有無を超えた出会いの場をひらきつつ、そこから生まれる表現のあり方についてよりフォーカスした講座を行っていきたいと思っています。

SALでは、地域とアートの問題について考えていくために、福岡県八女市黒木町笠原地区において、平成27（2015）年度から活動を展開しています。平成27年度の笠原地区のリサーチからはじまり、翌年の平成28（2016）年度には大型バスで笠原地区を訪れる「アートバスツアー」を企画運営。平成29（2017）年度には公募で集まった参加者がアートワークショップを経験し、アートプロジェクトを構想する講座を開催しました。

平成30（2018）年度からこれまでのプログラムを発展させる形で「奥八女芸農プロジェクト」を立ち上げ、2つのプログラムを並行して展開しています。1つめのプログラムは特例認定NPO法人山村塾で長年実施している国際ワークキャンププログラムと協働して実施している「奥八女芸農ワークキャンプ」です。今年はフランス、ベルギー、台湾、日本から参加者が集い、昨年度から招聘（へい）している民俗芸能アーカイバーの武田力さんと共に笠原地区に50日間滞在しました。農のプログラムでメンバーは、草刈り、里山保全、棚田修繕、復旧活動など多様な活動を経験しました。アートのプログラムでは、8月に笠原地区のリサーチを行い、八女のお茶文化や歴史について学んでいきました。9月からは、小規模多機能ホームよかよかに通い、地域の方々にお話を聞いていきました。その中で、笠原地区に江戸時代から伝わる民謡『八女茶山唄』に合わせる形で《八女茶山おどり》を創作。《八女茶山おどり》は、10月1日（火）に笠原地域の方々が集う交流会の中で披露し、さらに10月5日（土）に旧笠原小学校跡地で《八女茶山おどり》発表会を開催しました。

2つめのプログラムは「奥八女芸農学校」です。アートと農について考える短期合宿型のプログラムで、今年は8月29日（木）から31日（土）に開催しました。今年は、武田力さんに加え、アメリカで写真家として活躍されている兼子裕代さんを招聘アーティストとしてお迎えしました。武田さんは昨年度に引き続き、「現代に《民俗芸能》をつくる」ワークショップを行い、兼子さんは「サイアノタイプ」ワークショップを実施しました。農のプログラムでは、8月28日未明に起こった豪雨災害の状況から、棚田の水路の復旧活動（リカバリー作業）を行いました。3日目には、「シンポジウム『アート×農』を通じて地域づくりを考える」を開催し、これまでの活動の振り返りとこれからの可能性について議論していきました。

撮影（P22-23すべて）：富永 亜紀子

実践講座❸

奥八女芸農プロジェクト

共催：特例認定NPO法人山村塾　後援：八女市
助成：積水ハウスマッチングプログラム、令和元年度福岡県文化プログラム推進費補助金

Contents

1 奥八女芸農ワークキャンプスタート
8月22日（木）
⇓
2 奥八女芸農学校
8月29日（木）～31日（土）
＋
シンポジウム
「アート×農」を通じて地域づくりを考える
8月31日（土）
⇓
3 《八女茶山おどり》発表会
10月5日（土）
⇓
奥八女芸農ワークキャンプ終了
10月10日（木）

〉2018年度の振り返り〈

「奥八女芸農ワークキャンプ」ではゲストアーティストの武田力さんと3人のワークキャンプメンバーが共に、28日間に渡り「アート」と「農」について考えていきました。笠原地区に生きる人々に丁寧に話をうかがうプロセスを通じ、生活に息づく「動き」を知り、それに着想を得て新しい民俗芸能としての踊りを創作しました。この民俗芸能は、試演という形で地元の方々の前で発表されました。

2泊3日の短期合宿型の「奥八女芸農学校」では、2人のゲストアーティスト（武田力さん、ジェームズ・ジャックさん）によるワークショップを経験することや、地域の農作業を体験することを通じて、「アート」と「農」のつながりについて考察する機会をつくりました。

左）毎年、奥八女芸農学校はオリエンテーションからプログラムが始まります
中）天気に恵まれ、田んぼの草刈り作業を農のプログラムで行いました
右）「現代に《民俗芸能》をつくるin笠原」試演の様子。民俗芸能を新しく創作

① 奥八女芸農ワークキャンプ

8月22日（木）～10月10日（木）［50日間］

奥八女芸農ワークキャンプは、特例認定NPO法人山村塾が長年主催している国際ワークキャンププログラムの一環として、笠原地区に滞在をしながら、アートと農について考えていくプログラムです。ゲストアーティストに、昨年に引き続き日本各地で民俗芸能アーカイバーとして活動を展開している武田力さんをお迎えしました。また、滞在期間を昨年の28日間から、今年は50日間へと大幅に伸ばしました。ワークキャンプのメンバーとしては、フランスから2名、ベルギーから1名、日本から1名、そして今回研究のフィールドワークの一環として九州大学芸術工学府の修士課程で学ぶ台湾からの留学生1名が参加しました。武田さんを含めワークキャンプメンバーは、アートのプログラムだけではなく、笠原地区の棚田保全、ヤギ牧場の管理、田畑の草取り、作物を育てる畑作業等の農業プログラムなどに取り組みました。

今年のアートプログラムのテーマは「記憶」でした。笠原地域をリサーチすることから始め、笠原地区にある小規模多機能ホームよかよかに週1回のペースで通い、よかよかで暮らす人々にこの地域に関わる話を聞くことで、この土地が持つ歴史や文脈を理解していきました。話を聞く時の身体の動きや振る舞いにも着目しました。この身体の動きを集め、地域に伝わる民謡『八女茶山唄』に合わせることで、《八女茶山おどり》を完成させました。

完成した《八女茶山おどり》は、まず笠原地域の交流会の中で発表し、地元の皆さんと踊りを共有していきました。10月5日（土）の《八女茶山おどり》発表会は、旧笠原小学校の跡地にやぐらを組み、お祭り形式で開催しました。『八女茶山唄』の唄い手は、八女市の観光大使を務める馬場美雅（みか）さんと松尾みなみさんにお願いし、音響を「笠原まつり だってん祭」を運営されている山本隆文さんにご協力いただきました。発表会では、武田さんがワークキャンプ活動を振り返り、踊りの振りが持つ意味を説明していきました。そして何度か練習した後に、全員で踊りました。やぐらを中心に二つの円を作りながら、《八女茶山おどり》はたくさんの人を巻き込んでいきました。［発表会の詳細はp.28にて］

『八女茶山唄』の歌詞は、お茶摘みの手伝いにきた地域外からの労働者との出会いや、再会の約束が描かれています。その唄に合わせた今回の踊りの特徴は、2人ペアになって踊るシーンが多くあることと、そのペアになる相手が節ごとに変わっていくこと。歌詞と同じように、その場での出会いを生み出していきます。その出会いは、人と人の出会いだけではなく、その地域の文脈や、歴史や記憶との出会いともいえます。およそ江戸時代から唄い継がれている『八女茶山唄』と共に、《八女茶山おどり》も人や文脈や歴史をつなぐ芸術の行為として、この地域で展開をしていくことを期待させられました。

撮影：特例認定NPO法人山村塾

講師プロフィール

武田 力［リキ］（日本）
演出家、民俗芸能アーカイバー
演劇カンパニー・チェルフィッチュで欧米を中心に活動後、過疎化の進む滋賀県朽木古屋集落の六斎念仏踊りの継承に関わる。こうした民俗芸能の構造から現代社会を観客と軽やかに思考する作品を展開する。

参加者：5名（フランスから2名、ベルギーから1名、台湾から1名、日本から1名）
開催地：福岡県八女市黒木町笠原地区
滞在場所：笠原東交流センター えがおの森
コーディネーター：小森 耕太（特例認定NPO法人山村塾理事長）、原 愛子・黄 柏瑋（山村塾スタッフ）、長津 結一郎（SAL教員）、藤原 旅人（SALスタッフ）
協力：馬場 美雅（八女市観光大使）、松尾 みなみ、山本 隆文、NPO法人NICE（日本国際ワークキャンプセンター）、小規模多機能ホーム よかよか、村谷 つかさ（SAL学術研究員）、白水 祐樹・眞﨑 一美（SALスタッフ）
映像記録：仁田原 力

ワークキャンプでの活動内容

キャンプ期間中、メンバーたちはほぼ毎日活動を行いました。
その記録を、シミンさんが綴ったエピソードとあわせて紹介します。

水路を修復する作業をしている時に、地元の方々が「ありがとう、助かった」と言ってくれました。本当に嬉しいです。地元の方々にいろいろ教えてもらい、その教えてもらったことを活用して手伝いをすることはとても良い循環だと思いました。

今日、インタビューした勲さん（左から3人目）はとても親切でした。手揉みの時に、匂いだけでお茶の具合がわかること、若い時に毎日ほかのお茶畑を見てお茶づくりを学んだこと、京都や静岡に、お茶の研修で参加したことなどについてお話を聞きました。勲さんのお話から、お茶づくりへの誇りとこだわりを感じました。

松本勲さんのインタビューより

私が小さい頃の昔は、お茶揉みは太か釜で下に火を燃やして炙っていたんだよ。炙ったお茶を筵（むしろ）の上でお茶を揉んだものだよ。それを茶山唄に合わせて揉んでいたね。揉む時に、「もまっしゃれもまっしゃれ」と言いながら家族とみんなで揉んでいたよ。多い時には柳川あたりから泊まり込みでここに登ってきて、一軒に何十人も来ていたよ。私が7歳の時まで、そうやって揉んでいたね。それ以降は焙炉（ほいろ）の上で揉んでいたね。どの家もお茶を揉む小屋を持っていたよね。朝、3時に起きて、火をつけて、そこから生茶を蒸したんだよ。この生茶を混ぜるところが重要で、それは年が上の人の役割だった。私ら、若い人はお茶揉みをしていたね。

8月

22日（木）　ワークキャンプスタート
23日（金）　オリエンテーション
24日（土）　はじめての農作業
25日（日）　田んぼのイノシシ防止対策作業
26日（月）　草刈り機の操作を学ぶ
27日（火）　草刈り機のメンテナンスについて学ぶ
29日（木）～31日（土）　奥八女芸農学校に参加

イノシシ対策として、田んぼの周りに電線を二重に張る仕事を教わりました。古い電線を外し、固定用の棒を約2メートルの幅でもう一度土に刺していきます。電線が架かっている場所の草刈りや雑草を抜きながら、外した電線を貼り付けました。今日はメイウェンの19歳の誕生日でした。

9月

5日（木）　草刈り活動
6日（金）　小規模多機能ホームよかよかを初訪問
7日（土）　豪雨災害の復旧活動（リカバリー活動）の手伝い
9日（月）　FM八女の生放送に参加
10日（火）、12日（木）　敬老会で披露するパフォーマンスの練習
13日（金）　よかよかの敬老会に招待される。パフォーマンスを披露
14日（土）　伐採試験の見学
15日（日）　星野村の伝統舞楽「風流・はんや舞」の見学
17日（火）　《八女茶山おどり》発表会の看板制作
18日（水）　九州大学の学生と一緒に森林の枝打ち作業
19日（木）　よかよかにて、お話をうかがう
22日（日）　よかよかの利用者・松本勲さんのご自宅にてお話をうかがう
23日（月・祝）　彼岸花ツアーを手伝う。ファビアンのお別れパーティー
24日（火）　《八女茶山おどり》発表会の看板の仕上げ
25日（水）　みんなで『八女茶山唄』について理解を深める
26日（木）　《八女茶山おどり》の練習
27日（金）、29日（日）　草刈り作業
30日（月）　よかよかにて《八女茶山おどり》の初披露。FM八女に武田さんが出演

よかよかを初訪問しました。キャスリンたちは日本語での自己紹介を一生懸命練習しました。よかよかの皆さんはフランス語で挨拶をしてくれました。地元の皆さんとお話ししたかったのですが、ハ女弁がほとんど聞き取れなくて残念でした。地元の方が歌を唄ってくれました。

よかよかの敬老会に参加しました。どじょうすくいも踊りました。すごく恥ずかしかったけど、やるしかない雰囲気でした。その後、私たちの創った踊りを発表しました。力さんはとてもわかりやすく動きの意味を説明し、そのおかげで、よかよかの皆さんも一緒に踊ることができました。

10月

1日（火）　地元のお祭り「願成就」に参加。夕方からの交流会にて《八女茶山おどり》を披露
2日（水）　ラッキョウ畑の草取り
3日（木）　旧笠原小学校跡にやぐらを設置
5日（土）　《八女茶山おどり》発表会を開催
9日（水）　フェアウェルパーティー
10日（木）　ワークキャンプ終了

今日はお祭りの日です。山の神様に1年間の感謝の気持ちを伝え、「願成就」というお祝いをします。交流会では《八女茶山おどり》も披露しました。たくさんの人が一緒に踊ってくれました。皆さんとても楽しそうで、私も感動しました。

② 奥八女芸農学校

8月29日（木）～31日（土）［3日間］

今年度の「奥八女芸農学校」では、「撮り、踊り、田に入る。言葉を見つける3日間」をテーマに、演出家・民俗芸能アーカイバーの武田力さん、アメリカを拠点に活躍する写真家の兼子裕代さんを招聘し、アートプログラムを担当していただきました。また、農業に関するプログラムは、協働団体である特例認定NPO法人山村塾の小森耕太さんに担当していただきました。

当初は一般からの受講生を募集し、多くの方々に応募いただきましたが、合宿前日の8月28日未明に豪雨が発生し、笠原地区にも甚大な被害がありました。そのためやむなく外部からの受講生に参加いただく形は中止とし、すでに現地入りしていた武田さん、兼子さんのプログラムを、滞在中の「奥八女芸農ワークキャンプ」（p.24参照）のメンバーたちなどともに実施することとしました。また豪雨災害の状況から判断して、農作業のプログラムを急遽変更し、棚田の災害復旧活動（リカバリー活動）を行いました。8月31日には「シンポジウム『アート×農』を通じて地域づくりを考える」を開催しました。

参加者：9名　**開催地：**福岡県八女市黒木町笠原地区
ファシリテーター：小森 耕太（特例認定NPO法人山村塾理事長）、朝廣 和夫・長津 結一郎（SAL教員）
コーディネーター：藤原 旅人（SALスタッフ）
スタッフ：原 愛子・黄 柏瑋（山村塾スタッフ）、村谷 つかさ（SAL学術研究員）
アシスタント：石田 絵里香（神戸大学学生）、黄 敏旻（九州大学大学院学生）

1・2日目

「現代に《民俗芸能》をつくる」ワークショップ

参加者は、奥八女芸農学校の滞在拠点である笠原東交流センター・えがおの森から徒歩10分程度の古民家「えんがわ」まで、時間をかけて歩いていく中で、自分の身体を介し、自らの記憶と向き合いました。その後、到着した順番で「えんがわ」で5人ほどのグループに分かれ、その記憶を共有するための発表を一人ひとり行い、発表するときに起こる身体の動きや表現をグループで共有しました。

記憶を手がかりに生まれた身体の振りを基にして、この地域に伝わる民謡『八女茶山唄』に沿って、それぞれの振りを合わせるディスカッションも行い、丁寧に対話や議論をしながら、一つの踊りを作っていきました。

講師プロフィール　武田 力（たけだ りき）→p.24参照

「サイアノタイプ」ワークショップ

サイアノタイプは、暗室を使わず、感光紙を日光に照らすことによって現像できる写真のワークショップです。兼子さんのワークショップは3種類の紙に現像液を塗り、感光紙を作成することから始まりました。今回のワークショップでは地元八女で作られている和紙も実験的に使っていきました。

2日目の午前中に「被写体」となる素材を拾い集めました。植物や、泥、石など、その土地の文脈に紐づいたものが写真の材料となります。それぞれが集めた素材を感光紙に貼り、日光に当てていきます。幸いこの時間だけは日差しが強く、きれいに模様が浮き上がりました。各参加者の創造力が喚起され、素晴らしい作品がいくつも出来上がりました。

講師プロフィール

兼子 裕代（かねこ ひろよ）
写真家
現在カリフォルニア州オークランド在住。1998年より写真家、ライターとして活動。2009年に家族の入浴を撮った《センチメンタル・エデュケーション》でアメリカ新人作家に贈られるサンタフェ写真賞受賞。2020年2月に歌う人のポートレート・シリーズ『APPEARANCE』刊行。

2日目

棚田の水路の復旧活動（リカバリー作業）

奥八女芸農学校の「農」では当初、田んぼの中に足を入れ、泥にまみれて雑草を抜き取る作業を予定していましたが、8月28日未明に起こった豪雨災害の状況から、棚田の水路の復旧活動へと変更しました。

essay

災害と向き合う「農」の暮らし

文：小森 耕太

8月28日の朝、土砂降りの雨の音で目が覚めた後、私たちは雨が降り続く中で、大きな川石が濁流を伴いガランゴロンと流れていくのを眺めていました。雨が収まり、周辺を眺めると幸いにして7年前の豪雨災害ほどの被害はありませんでしたが、佐賀や長崎では大被害が発生しており、こんな状況で危険を冒してまでイベント実施はできないと、一般参加は中止の判断をとりました。

しかしここには、8月22日に開始した国際ボランティア4名と山村塾スタッフ、武田さん、兼子さん、SALの皆さんが芸農学校に向けて既に集まっていました。私たちはイベント実施可否だけでなく、今ここにいる人たちに何ができるのか、そして集落が何を必要としているのかについて話をしました。結果、「アート」プログラムは今いるメンバーにて実施し、「農」は予定を変更して、土砂が流れ込んだ農業用水路の土砂出しボランティアを行うことを決めました。土砂出し作業は半日足らずでしたが、10名超の人たちが力を合わせ、田んぼに水を引き込むまで回復しました。集落の田んぼと用水路の一部が奥八女芸農プロジェクトによって復旧されたのです。

「農」の暮らしでは、自然の豊かさを感じるだけでなく、自然災害とも向き合わざるを得ません。だからこそ、日常を置き去りにして災害と向き合うのではなく、暮らしという日常の中で、周囲の人たちと手を取り合って生きていく事が大切なのだと改めて考えさせられました。

小森 耕太（こもり こうた）
特例認定NPO法人山村塾理事長
大学時代に山村塾の活動と出合い、2000年から山村塾事務局スタッフとして八女市黒木町に移住。以後、地域の農林家と連携し、里山保全活動、都市農山村交流活動を企画運営してきた。平成24年7月九州北部豪雨で甚大な被害を受けた笠原地区の復興に関わった。

3日目

シンポジウム「アート×農」を通じて地域づくりを考える

2015年より八女市黒木町笠原地区にてSALが特例認定NPO法人山村塾とともに展開してきたこれまでの歩みや、今取り組んでいる事例を振り返る機会としてシンポジウムを開催し、多くの地域住民の方々のほか、今回の奥八女芸農学校に参加する予定であった方々にも集まっていただきました。

第1部では本学教員の長津結一郎が、映像や写真を使いながら、2015年から笠原地区にて展開したプロジェクトの振り返りを行いました。また、招聘アーティストの武田さんと兼子さんから、今年度の奥八女芸農ワークキャンプや奥八女芸農学校についての紹介もありました。

第2部では、山村塾理事長の小森さん、本学教員の朝廣和夫、中村美亜と長津によるクロストークを行いました。アートを媒介に引き起こされる多様な人との新しい関係や対話の必要性が議論に挙がりました。

参加者：30名　**会場：**八女市黒木総合支所1階 大会議室
時間：13:30～15:30（13:00開場）　**参加費：**無料
登壇者：武田 力（演出家、民俗芸能アーカイバー）、兼子 裕代（写真家）、小森 耕太（特例認定NPO法人山村塾理事長）、朝廣 和夫・中村 美亜・長津 結一郎（SAL教員）
スタッフ：黄 柏瑋（山村塾スタッフ）、村谷 つかさ（SAL学術研究員）、藤原 旅人・眞﨑 一美（SALスタッフ）、石田 絵里香（神戸大学学生）、黄 敏旻（九州大学大学院学生）

撮影（P26-27すべて）：富永 亜紀子

③《八女茶山おどり》発表会

10月5日（土）

旧笠原小学校校舎跡地にて発表会を開催しました。会場には、甘酒、たこ焼き、わた菓子などの屋台も出て、お祭り仕立ての発表会となりました。100名近い地元の方々にご参加いただき、和気あいあいとした雰囲気の中、発表会を開くことができました。

まずは招聘アーティストの武田力さんに、ワークキャンプの振り返りと《八女茶山おどり》ができるまでをご紹介いただきました。そして、ワークキャンプメンバーが完成した《八女茶山おどり》を披露し、その後に踊りの振りについて武田さんから説明がありました。一つひとつの振りには意味があり、その意味は踊りの音楽である『八女茶山唄』の歌詞ともつながっています。今回、いろいろとお話を聞かせていただいた小規模多機能ホームよかよかの方々や、ご支援いただいている地元の方々にも参加いただき、やぐらを囲みながら、全員で踊りました。

みんなで円になって踊りました。唄い手は、八女観光大使でもある馬場美雅さんと松尾みなみさん

《八女茶山おどり》の説明と振りの解説を行う武田さん

よかよかの皆さんを中心に、地元の方々が一緒に踊ってくれました。皆さんお上手です

当日は、たこ焼き、わた菓子、甘酒などの屋台も出ました！

この日のために、しっかりと練習してきました。衣装の甚兵衛もこの日のために用意しました

参加者：95名　**会場：**旧笠原小学校校舎跡地
時間：16:00〜18:00　**参加費：**無料
出演者：武田 力（演出家、民俗芸能アーカイバー）、澤田 莉沙（日本）、Kathleen Berthus（ベルギー）、Rault Maiwenn（フランス）、高 詩旻（台湾）
スタッフ：小森 耕太（特例認定NPO法人山村塾理事長）、原 愛子・黄 柏瑋（山村塾スタッフ）、長津 結一郎（SAL教員）、村谷 つかさ（SAL学術研究員）、藤原 旅人・白水 祐樹・眞﨑 一美（SALスタッフ）、黄 敏旻（九州大学大学院学生）

撮影（このページすべて）：富永 亜紀子

essay

《八女茶山おどり》で現代を生き抜く

文：武田 力

お茶の産地として名高い八女。5月の八十八夜には多くの出稼ぎの方がこの土地を訪れ、受入れの家族とともに一つ屋根の下で寝起きをし、茶葉を摘み、釜で炒り、大きな台の上で何時間も揉み込みました。そんな気の遠くなるような共同作業の際に皆で唄い、継がれてきたのが『八女茶山唄』です。しかし現代ではその作業も機械化され、口ずさまれる機会も少なくなりました。

『八女茶山唄』に踊りをつけるのに、それが作業歌として唄われた時代を知る方々にお話をうかがいました。保育園跡地に開設された小規模多機能ホームよかよかに、フランスやベルギーなど海外からのワークキャンプメンバーと共に通い、当時の茶揉みの仕方から、何をこの土地は大事にしてきたか、これからをこの土地で生きる人たちには何を守り継いで欲しいかなどをお訊きしました。誰かと出会い、共に働き「また来年、八十八夜の頃に会おう」とそれぞれの土地に帰っていく。人に生かされ、人に生きた彼らの記憶や願いの一つひとつを振りに込めていきました。いつの世も変化は必然ですが、心も追いつかないままに移ろう現代を果敢に遡行する一つの回路として、この《八女茶山おどり》も生かされ、生きていくことを望みます。

写真で解説！

『八女茶山おどり』振り付け

by 武田 力

1

♪ハァー

両手を胸の前で合わせます。

2

♪ヤーレー

首と膝を軽く曲げて手招き。その後、1に戻って2度繰り返します。

3

♪縁が

右足から一歩踏み出して、右手は目の高さ、左手は腰の後ろへ。

4

♪ないなら

今度は左足から踏み出して、茶山を探します。

5

♪茶山にござれ

自分の耳元から腕を伸ばして、対面する相手の頬付近へ手を添えます。でもお触りは禁止！

6

♪茶山〜

5で相手の頬付近にある手をそのままに、一度に時計回りで半円回ります。その後、左足を引いて、左手を上に、右手を下にして半円を描きます。

7

♪茶どころ〜

今度は右足を引き、右手を上に、左手を下にして半分の月を描きます。

8

♪え〜

両手を上へ。円／縁を作ります。

9

♪ん

8よりさらに大きな円／縁を描いて、大きな満月に。そして、その満月を下から見上げてください。

10

♪どころ

茶葉を焦がさぬよう混ぜ合わせる「釜炒り」の動きと同じように、頭上にあった縁を結びます。

11

♪アァ 揉ましゃれ 揉ましゃれ

唄い手さんの掛け声と共に、今度は茶葉を揉み合わせる「茶揉み」の動きを2度します。

12

♪トコーサイ

掛け声に合わせて、下から水をすくい上げるようにして、顔を覆います。

13

♪サイー

12で覆った手を広げて、対面する相手に笑顔を見せてあげてください！

八女茶山唄

作詞・作曲＝不詳

ハァヤーレー　縁がないなら　茶山にござれ
（トコ　サイサイー）
茶山茶どころ　縁どころ
（アァ　揉ましゃれ　揉ましゃれ　トコーサイサイー）
ハァヤーレー　茶山戻りにゃ　皆菅の笠
（トコ　サイサイー）
どっちが姉やら　妹やら
（アァ　揉ましゃれ　揉ましゃれ　トコーサイサイー）
ハァヤーレー　お茶を飲むたび　わしゃ思い出す
（トコ　サイサイー）
茶山で結んだ　縁じゃもの
（アァ　揉ましゃれ　揉ましゃれ　トコーサイサイー）
ハァヤーレー　茶摘みゃしまゆる
じょもんさんな帰る
（トコ　サイサイー）
あとに残るは　てぼ円座
（アァ　揉ましゃれ　揉ましゃれ　トコーサイサイー）
ハァヤーレー　今年ゃこれきり　また来年の
（トコ　サイサイー）
八十八夜の　お茶で会おう
（アァ　揉ましゃれ　揉ましゃれ　トコーサイサイー）

写真カット出演者
〈奥八女芸農プロジェクトに関わった人たち〉
1. 武田 力（民俗芸能アーカイバー）
2. 小森 耕太（山村塾）
3. 黄 柏瑋（山村塾）
4. 金澤 真里（山村塾）
5. 右：小森 文子（山村塾）、左：小森 泰介
6. 原 愛子（山村塾）
7. 柴尾 悠（山村塾）
8. 眞﨑 一美（SAL）
9. Kathleen Berthus（ワークキャンプメンバー）
10. Fabien Rebuffo（ワークキャンプメンバー）
11. Rault Maiwenn（ワークキャンプメンバー）
12. 井上 佳子（FM八女）
13. 小規模多機能ホームよかよかの皆さん

地域に滞在し、文脈を学ぶ行為から

藤原 旅人（SALスタッフ）

今年度の「奥八女芸農プロジェクト」では、昨年度から関わっていただいている民俗芸能アーカイバーの武田力さん、そして今年から写真家の兼子裕代さんを招聘アーティストとしてお招きしました。昨年度に比べ、ワークキャンプは滞在期間を大幅に長くし、芸農学校は3日目のプログラムにシンポジウムを加え、より濃密なプログラムとして企画しました。

今年度の奥八女芸農プロジェクトで、2つのことを考えました。1つめは文脈についてです。武田さんのワークショップでは、笠原地区を散策し地域の文脈を意識する中で、自分の内なる記憶を模索することから始まります。兼子さんの「サイアノタイプ」ワークショップでは、被写体となる植物や石、泥などを探す行為から、笠原地区の記憶や文脈を理解していきます。また、ワークキャンプで完成した《八女茶山おどり》も記憶と文脈を集めた表現行為です。こうした文脈が、表現行為を媒介に読み解かれていくことは、奥八女芸農プロジェクトの大きな意義だと考えています。

もう一つは8月28日未明に起こった豪雨災害を経験したことで、いろいろなことを考えました。当日、ワークキャンプメンバーやスタッフは笠原地区に既に滞在しており、実際に自然の猛威を体感しました。ゴツゴツとふだん聞きなれない音で早朝に目が覚めたのですが、後からその音は、豪雨によって起こった濁流を流れていた岩と岩の衝突音だということがわかりました。福岡県内で警報が発令されたため、苦渋の決断でしたが、受講生の受け入れを中止しました。その中で、このままプログラムをすべて中止にするのか、今いるメンバーやスタッフだけでもプログラムを続けるのかという議論になりました。山村塾の皆さんの後押しもあり、メンバー内でプロジェクトを行い、3日目のシンポジウムも開催することができました。本当に感謝しております。この非常時にアートという表現行為を行うことがどんな意味を持つのか。また、私たちに何ができ、どんな役割を担うべきなのか。本質的な議論をメンバー内で共有することができました。フランスから来たメンバーが言っていました。「農を考えることはアグリカルチャー（農業）を考えることではなく、自然と対話する行為として捉えるようになった。そして、人を中心に置くのではなく、自然の生態系の中で自分がやるべきことを意識するようになった」と。おそらく、この言葉は、実際に笠原地区に滞在したからこそ出てきたのだと思います。

笠原地区に滞在し、地域の記憶や文脈に触れ、学びや議論の中で獲得した言葉には強さと重みがあります。今回この地域で獲得された言葉が、それぞれの地域でどのように展開していくのでしょうか。ここでの議論が、何を創り出していくのか。簡単ではない隘路（あいろ）ですが、今年の奥八女芸農プロジェクト内の学びや議論に、大きな可能性を感じています。

新たな農村文化としてのまちづくりへ

長津 結一郎（SAL教員）

今年度の事業は、八女市黒木町笠原地区にSALが関わらせていただくようになってから5年目となりました。1年目は受講生と共にリサーチを行い、2年目はそのリサーチを基にしつつ中山間地域と都市の交流をテーマとしたアートイベントを企画。3年目からは「奥八女芸農学校」という名称を使い合宿型の講座、さらに4年目からは中長期滞在のプログラム「奥八女芸農ワークキャンプ」も展開してきました。笠原地区の各集落の方々に大変お世話になりながら、少しずつ地域の方々とのつながりを深めてきた手応えがあります。

今年度は、災害により「奥八女芸農学校」の外部からの受講生参加を中止せざるを得ないという事態に見舞われました。私もその被害があった日に現地におりましたが、自然と付き合いながらコトを進めていくことの難しさに改めて直面しました。しかし、それでも、山村塾の皆さんが、全部やめてしまおう、と言わなかったことが、ほんとうにありがたかったと今改めて感じます。緊急時に文化を不謹慎なものとするのではなく、それも含めて日常の営みであり、農村文化だと捉えること。奇跡的に晴れ間が現れた兼子裕代さんのアートワークショップで、災害の重みで沈んでいた心が、表現することで晴れ渡ったような気がしたことも、私たちにとって忘れられない体験となりました。

奥八女での私たちの取り組みは、そろそろ次の展開を考える時期に来ています。この取り組みの萌芽を、どのような座組みで、どのように広げていくのが望ましいのか。人材育成の観点から今思うのは、この取り組みが目指すのは、異なる文化を持つ人々の交流も含めた、新たな農村文化としてのまちづくりです。これまでの文化のあり方をただ継承するだけでなく、地域的な文脈を生かしながら新たに文化を創出することが、いかに地域の人たちのエンパワメントにつながるかを、武田力さんには今年見せていただいたように思います。こうしたまちづくりの担い手となる人や場をどのように広げられるかを、次年度も引き続き考えていきたいと思います。

地域と姿を見せ合う半農半アート活動

朝廣 和夫（SAL教員）

福岡県八女市黒木町笠原の復興の歩み

平成24年7月九州北部豪雨から7年。笠原行政区の人口は災害前の1197人（2011年）から824人（2019年）と2011年比で、68.8%と373人（31.2%）に減少しました。家屋を失われた方や、家族の生活環境のために離村する方がおられる中で、多くの方々はご高齢によるものです。現在では復興も進み、多くの集落の方々が、営農を継続されています。中山間地の農業は厳しいものですが、農家の方々は、実にしなやかに生活を営まれています。

芸＋農の問い

このような中山間地の農には、生活、文化、自然などさまざまな側面があります。本プロジェクトでは、いくつかの問いを立ててきました。農とアートの活動を組み合わせることで、どのような表現が生まれるのか。その表現活動は、アートにとり、農業にとり、どのような価値があるのか。活動に携わった関係者は、どのような学びを深めたのか。このプロジェクトが歩んだ過程と成果は、どのように評価することができるのか。そして、今後の人材育成、各地への展開に資することができるのか、というような視点です。いずれも直ぐに解の出る話ではありません。過程を丁寧に記録し、振り返る中で議論を深めていこうと考えています。

NPO・地域伴走型で創作された表現

この福岡県八女市黒木町笠原でのSALの活動は2015年より開始され、特例認定NPO法人山村塾、地域の方々との連携を深めてきました。当初は、地域資源を共有するために体験、ツアーからはじまり、徐々に、NPOや地域との事業連携を深めています。2018年度からは、演出家・民俗芸能アーカイバーの武田力氏に参画いただき、「奥八女芸農ワークキャンプ」と銘打ち、国内外から参加したボランティアと半農半アート活動を約50日間、実施しています。今年度、武田氏は「記憶」をテーマとされました。2019年8月末に行われた奥八女芸農学校のワークショップでは、参加者が自分の記憶を頼りに身体表現を行いました。振り付けを合わせる音は『八女茶山唄』です。参加者は輪になり、それぞれの表現を踊りながら共有し、拍子に合わなければ、何度も何度も、ああでもない、こうでもないと言いながら、1つの踊りを作りました。また、このワークショップでは、兼子裕代氏のサイアノタイプフォトグラフィー（青写真）が行われました。これは、田畑や路傍で植物などの素材を太陽光で青写真に焼くという活動です。中には、倉庫に転がっている草刈り機やチェーンソーの刃、さまざまな素材を試す創作が生まれ、その多様な作品群は、大変、魅力的なものとなりました。

武田氏は最終的に《八女茶山おどり》の振り付けを完成させ、2019年10月5日に元笠原小学校跡地で、地域の高齢者福祉施設の皆さまと共に発表会を行いました。地元の方の『八女茶山唄』の生歌で、農業を退職された、懐かしい面々の方々と、創作された踊りを舞うひと時は、アートと農が、地域と来訪者が、自然と人々の営みが、結ばれたと感じられました。

関係者の学び

芸農学校の最終日には、「シンポジウム『アート×農』を通じて地域づくりを考える」を八女市黒木町の庁舎で行いました。武田氏からは、「昔は、このように民俗芸能を作っていたのではないだろうか」「この活動を通じ、そのプロセスを現代に再現しようと試みた」という話をいただきました。農村の丁寧な日々の営みから紡ぎだされる芸能。氏は後日、山村塾の会誌（2019年12月号）の中で、「日常と非日常との絶え間ないささやかな往還が日本人の暮らしを形成してきた」と述べられていました。

兼子氏からは、「ふだん、見ていないものを見る」「日常の些細なものから美しいものを取り出してアートにする」という話をいただきました。サイアノタイプの活動で経験した創作活動は、農村の素材を活かした創作の楽しさ、際限ない可能性を感じることができました。

山村塾の小森氏からは、「災害後、地域のつながりが強くなった」「農家の日々は忙しい。だからこそ、アートという異なる視点で地域をみる余裕を楽しみたい」という話をいただきました。災害は、心も、景観も破壊していく。復興の過程で、絆を深め、復旧工事で物理的にも強くなっていく。こうして農山村は、続いていくのかもしれません。

武田氏は会誌の中で施設の利用者さんの、「自身を律しながら、みんなで助け合いながら仕事をし、生活する姿を見せ合って生きてきた」との言葉がずっと頭に残っているとも紹介されました。奥八女芸農ワークキャンプは、農家の日々に余所者が訪れ、農作業ボランティア、アート制作活動を行い地域の理解を深めていく。また、地域の方々にその姿を見せ合う場となりました。だからこそ、地域の方々は日常の中に私たちを受け入れ、助け合いの手を差し伸べていただいたのだと思います。日々の半農半アートの積み重ねは、お祭りで、そして、再び来るかもしれない災害時に活かされます。この活動の、農業、アートへの意義は、こういう点にあるのだと考えられます。

＊

さて、本活動の評価、人材育成活動への展開は、さらに、検討と議論が求められるところです。2020年度以降も、成果の整理と、活動を通じて継続する予定です。関係者の皆さまには御礼申し上げますとともに、今後とも、よろしくお願いいたします。

公開講座

全3回

「社会包摂」に関わる芸術活動で、実践講座で捉えきれない多様な活動について触れ、考える機会を提供し、いずれの講座も大変多くの方に受講いただきました。第1回の講座は、90年代の伝説的パフォーマンスグループ「ダムタイプ」の公演映像上映とトークを通じ、HIV/AIDSの文脈から表現が生まれたプロセスやその手法に触れました。第2回では、茨城県取手市の取手アートプロジェクト「アートのある団地」の取り組みをうかがうトークを通じ、高齢化・多国籍化するこれからの団地におけるコミュニティのあり方とそこにあるアートの役割について考えました。第3回では、在日コリアンの音楽についてのドキュメンタリー映画の上映とトークを通じ、国の歴史やその社会的状況の現状を知り、そこからどのような表現が生まれるのかを知る機会をつくりました。

Contents

1 第1回
人と人との境界を問う
—ダムタイプ《S/N》上映&トーク
11月4日（月・祝）

2 第2回
アートで豊かになる団地
12月4日（水）

3 第3回
生きるための音楽
《アリラン峠を越えていく》
上映会&トーク
1月25日（土）

〉2018年度の振り返り〈

全4回の公開講座を実施。第1回と第2回では障害のある人の表現が社会とつながることについて触れ、第3回では衝撃的な行為から過剰ともいえる表現を生み出す人たちを紹介、第4回では写真を通じて自然や他者との共存の美しさに触れました。

第1回　「障がい者アート」という言葉の背後にあるもの
—ドキュメンタリー映像作品「地蔵とリビドー」
上映&トークセッション
7月29日（日）

撮影：長野 聡史

第2回　「障がい者アート」の可能性 in 香港
—i-dArtのユニークな思想と実践
10月22日（月）

写真提供：i-dArt

第3回　アウトサイダーアートが問いかけるもの
—福祉と芸術の狭間から
10月28日（日）

第4回　兼子裕代写真展とトーク
GARDEN PROJECT 光と土—持続する希望のために
3月23日（土）～29日（金）※トークイベントは3月23日（土）

兼子裕代写真展の展示作品より

第1回
人と人との境界を問う
―ダムタイプ《S/N》上映&トーク

―

11月4日（月・祝）

本講座は、1990年代に国内外でセンセーションを巻き起こしたアーティストグループ、ダムタイプのパフォーマンス《S/N》を通して、「アートと社会包摂」の意味を問いなおし、社会課題を扱う芸術の可能性や作品の関係者としての向き合い方を考える機会としました。

まず、プレトークとして、ダムタイプの背景や今回上映する記録映像について、作品に出演したブブ・ド・ラ・マドレーヌさんに、本学教員の中村美亜がお話をうかがいました。1980年代のHIV感染者とAIDS発症者は、完治しない病気として恐れられ、未知の病がゆえに差別や偏見を受けていました。そして、ダムタイプのメンバーの一人がその当事者となり、ダムタイプのメンバーにとっても他人事ではなくなり、それぞれの表現にも変化が起きていったことなど、映像からは知りえない出来事がうかがえました。

その後、《S/N》の公演当時に作品の音楽を担当されていた山中透さんによるサウンド・オペレーション（記録映像の音響をライブによる操作で上映）で、85分の記録映像《S/N》を鑑賞しました。受講者は、音に込められたメッセージもダイレクトに感じることができたのではないでしょうか。

休憩後のトークセッションでは、中村が聞き手となり、制作に関わったブブさんと山中さんから、《S/N》の制作や表現についてお話しをうかがい、セクシュアリティをめぐる状況、社会課題を扱う芸術の可能性について考えました。

作品を知る受講者からは、「当時公演を観て受けた衝撃が、映像を見ながらよみがえってきて、涙が出てきて止まらなかった。とても不思議な感情だった」という感想をいただき、初めて本作を観た受講者からは「AIDSやHIVのことをまったく知らなかったし、差別があったことも知らなかったが、ほかの病気や障害など当てはまることは今でもたくさんあるなと思った」などの感想をいただきました。

《S/N》が今回の受講者に衝撃や気づきを与えたことは確かなようでした。

《S/N》とは

シグナル（Signal）とノイズ（Noise）の境界はどこにあるのか。生／死、男性／女性、外国人／日本人、同性愛／異性愛、障害／健常……さまざまな境界への問いを観る人に鋭く突きつけるダムタイプのパフォーマンス作品。1994年に初演され、国内外でセンセーションを巻き起こし、今でも多くの問いを観る人に投げかける。

撮影（2点とも）：富永 亜紀子

参加者：164名　**会場：**福岡市科学館 6階 サイエンスホール
時間：17:30〜20:40（17:00開場）　**参加費：**無料
スタッフ：長津 結一郎（SAL教員）、村谷 つかさ（SAL学術研究員）、眞﨑 一美・白水 祐樹・藤原 旅人（SALスタッフ）
UDトーク：川上 里以菜・墨田 知世・小松 駿斗（九州大学学生）
協力：九州レインボープライド実行委員会
後援：福岡市

講師プロフィール

BuBu de la Madeleine（ブブ・ド・ラ・マドレーヌ）
アーティスト
《S/N》（1994-96）に出演後、国内外のアーティストとの共同またはソロでパフォーマンス、映像、テキスト等による作品を発表。同時にHIV/エイズと共に生きる人々やセックスワーカー、女性、セクシュアルマイノリティ等の健康と人権に関する市民運動に携わる。

山中 透（やまなか とおる）
作曲家・プロデューサー・DJ
学生時代に京都を中心に実験音楽系のフィールドで活動するなか、ダムタイプの立ち上げにも参加し、創世記のメンバーとして音楽と音響を担当。いまも続く伝説的なドラッグクイーン・イベント「Diamonds Are Forever」のDJ・主催者で、さまざまな分野の人々とコラボレーションを行っている。

中村 美亜（なかむら みあ）
SAL教員
芸術活動が人をエンパワメントし、関係性に変化をもたらすプロセスや仕組みに関する学際的研究、その知見を生かした文化政策研究を行っている。著書に『音楽をひらく：アート・ケア・文化のトリロジー』（水声社、2013）、『クィア・セクソロジー：性の思いこみを解きほぐす』（インパクト出版会、2008）など。

第2回
アートで豊かになる団地

―

12月4日（水）

日本の高度経済成長期の住宅需要に応えるために、多くの「団地」が生まれてきました。40年以上経過した団地も多く、どのように再生、再整備していくかが大きな課題となっています。本講座では、茨城県取手市で「アートのある団地」プロジェクトの企画運営をされているNPO法人取手アートプロジェクトオフィス理事・事務局長の羽原康恵さんをゲストに迎え、団地とアートの関わりについての講義がありました。

講座は、まず本学教員の田上健一より、日本の団地の現状や、福岡の団地事情について教えていただきました。

続いてゲストの羽原さんから、取手市で実施している「アートのある団地」プロジェクトについてお話しいただきました。取手市は東京の郊外都市で、井野団地と戸頭団地という2つの大きな団地があります。2010年に始まった「アートのある団地」事業で多世代交流型拠点・いこいーの＋Tappinoというスペースが設立されました。そこでは、個人の「得意技」を貨幣に見立て、貯金したり引き出すことができる《とくいの銀行》、また2人の宿泊客のためにさまざまなおもてなしをする《SUN SELF HOTEL》等のユニークなプロジェクトが展開され、プロジェクトに参加した団地の住民たちは自分の得意技や知恵を出し合いながら、相互の新しい関係性を構築していったといいます。また、「アートのある団地」事業では、アートに特化した事業だけではなく、こども食堂や、哲学カフェ、人材育成講座なども実施されています。

後半では、本学教員の中村美亜を司会に、田上、羽原さんとのクロストークを行いました。フロアを交えた質疑では、「アートが地域社会の中でどのくらい力を発揮できるのか？」「アートを切り口にしなければいけないのか？」という問題も提起され、講座のテーマである「アートと社会包摂」に関する本質的な議論にも話が及びました。

参加者：90名　**会場：**九州大学大橋キャンパス デザインコモン2階
時間：19:00〜20:45（18:30開場）　**参加費：**無料
スタッフ：長津 結一郎（SAL教員）、村谷 つかさ（SAL学術研究員）、藤原 旅人・白水 祐樹・眞﨑 一美（SALスタッフ）
UDトーク：密岡 稜大（九州大学大学院学生）、川上 里以菜・小松 駿斗（九州大学学生）
協力：九州大学大学院芸術工学研究院田上健一研究室

講師プロフィール

羽原 康恵（はばら やすえ）
特定非営利活動法人取手アートプロジェクトオフィス理事・事務局長
大学院在学中に取手アートプロジェクト（TAP）に2年間インターンとして関わる。取手アートプロジェクトのフェスティバル型から通年プロジェクト型への転換期を担い、コアプログラム《アートのある団地》の立ち上げほか、拠点運営・プロジェクトの企画運営、アーティストと住民をつなぐための中間支援、人材育成などに取り組む。

田上 健一（たのうえ けんいち）
九州大学大学院芸術工学研究院教授
建築計画を専門とし、持続的な住宅地のあり方に関する研究に取り組んでいる。特に、地球規模での災害や貧困に起因する居住問題の克服や、住民参加型の計画に力を入れている。学校、病院、集会所、住宅などの建築設計も実践しており、マニラやホーチミンでは集合住宅計画が現在進行中。

中村 美亜（なかむら みあ）
→左ページ参照

撮影（2点とも）：富永 亜紀子

第3回
生きるための音楽
《アリラン峠を越えていく》上映会&トーク

1月25日（土）

本講座では、ドキュメンタリー映像《アリラン峠を越えていく》の上映と、映像制作に関わった寺田吉孝さん、髙正子さん、安聖民さんを交えてのトークを行いました。

まず髙正子さんから、在日コリアンの歴史と、ドキュメンタリー映像を制作するに至った経緯を説明いただき、映像を上映。鑑賞後に、ゲスト3名に登壇いただいてトークセッションを開きました。

監修の寺田さんと髙さんから「2年に渡って収録した膨大な取材映像の中から、どの部分を残すか、その編集作業が大変だった。編集に1年を要しました」と、制作過程の大変さが話に出ました。また、この映像の特色として、ナレーターを用いずに、出演者である在日コリアンの音楽家たちの「声」で構成されている点が挙げられました。そして「ある一つの方向への結論」を伝える映像ではなく、考えるきっかけになってほしい、という制作意図も語られました。それ故に、これまで各地で上映会を開いてきた中で「答えのない映画だ」という感想が寄せられることもあったそうです。しかし、制作側が観る人へ一方的に何かを訴える映像というよりも、「考える場を提供する」ことを大切にしたいという考えを、2人とも示されました。

また、寺田さんはさまざまなマイノリティ集団の音楽文化を映像番組にしてきた経験から「在日コリアンに限らず、すごく辛い差別を受けてきた人たちは、そのことを自分の子どもたちには語らないことが多い」と話されました。

そのような貴重なお話から、さまざまな立場の人たちの記憶を記録、伝承、共有することの重要さや、伝える側の人が客観性・公平性を保つことの大切さを学ぶことができました。

最後は安聖民さんがチャンゴ（朝鮮半島の伝統的な打楽器）を叩きながらアリランメドレーを歌唱。客席の参加者からも手拍子と歌声が響き、演奏が終わると会場のミュージアムホールが大きな拍手に包まれました。

《アリラン峠を越えていく》とは

2014年に国立民族学博物館講堂で行われた研究公演をきっかけに、2017年まで取材・編集を重ねて制作されたドキュメンタリー映像。日本社会への同化圧力にさらされ、「私は誰？」とアイデンティティの混乱に見舞われながらも、しなやかに生きる在日コリアンの音楽家たちの姿が描かれている。

参加者：98名　**会場：**福岡市美術館1階 ミュージアムホール
時間：14:00〜17:00（13:30開場）　**参加費：**無料
スタッフ：長津 結一郎（SAL教員）、村谷 つかさ（SAL学術研究員）、白水 祐樹・眞﨑 一美・藤原 旅人・山本 哲子（SALスタッフ）
UDトーク：密岡 稜大（九州大学大学院学生）、川上 里以菜・小松 駿斗（九州大学学生）
後援：福岡市

ゲストプロフィール

寺田 吉孝（てらだ よしたか）
国立民族学博物館学術資源研究開発センター教授
マイノリティ集団の音楽文化に関する映像番組の制作に関わりながら、音楽研究における映像音響メディアの可能性を検討している。制作番組に、『大阪のエイサー―思いの交わる場』（2003年）、『怒―大阪浪速の太鼓集団』（2010年）など。

髙 正子（コォ チョンジャ）
神戸大学非常勤講師
在日コリアンの生活文化を研究。主な執筆に『「食」に集う街―大阪コリアンタウンの生成と変遷―』『食文化から異文化理解』（河合利光編著、2009、時潮社）。韓国語共著『大阪在日コリアン社会とフェスティバル』、『在日済州人の生活史1，2』など。

安 聖民（アン ソンミン）
パンソリ唱者
大阪市生野区生まれ。重要無形文化財第5号パンソリ「水宮歌」技能保有者である南海星先生に師事し、2016年履修者認定。2013年 第40回南原春香国楽大典・名唱部にて審査員特別賞受賞。2016年「水宮歌」完唱公演。2019年「興甫歌」完唱公演。

聞き手 中村 美亜（なかむら みあ）→p.34参照

撮影（3点とも）：富永 亜紀子

教材開発

ハンドブック作成／人材育成モデル検討会／公開ディスカッション

今年度は、「教材開発」として主に3つの活動を行い、実践講座や調査研究を通してわかった内容をまとめ、情報を発信しました。

1つめは、社会包摂につながる芸術活動の「評価」について、異なる立場の関係者が協働する際に、議論や実践のプラットフォームとなるようなハンドブックの制作です。これは、2018年度より実施している文化庁との共同研究事業「文化芸術による社会包摂の在り方」と連動した活動であり、昨年度作成したハンドブック（下記参照）の続編と位置付けています。

2つめは、「人材育成モデル検討会」です。これは、SALで行っている実践講座や調査研究でわかったことを基に、SALとして考える「アートマネジメントとは？」「人材育成とは？」など、基本的な概念の整理や、社会包摂につながる芸術活動に関するモデル構築を目指した活動です。SALの教員・スタッフ全員で、およそ月に一度の議論を一年間つづけ、その成果をまとめました。

3つめは、今年度の事業関係者が一堂に会し、次年度に向けた課題や要点について参加者を交え議論する公開ディスカッションです。ふだんは異なるフィールドで活動している関係者間の交流を図るとともに、年次の活動報告や、次年度に向けた課題や方針を確認する機会としました。

撮影：NPO法人ドネルモ

Contents

1 ハンドブック作成
2019年4月～2020年3月
共同研究会（非公開）計7回
公開研究会（公開）計2回

2 人材育成モデル検討会
2019年4月～2020年3月
非公開 計9回実施

3 公開ディスカッション
2月8日（土）実施

2018年度に作成したハンドブック
『はじめての“社会包摂×文化芸術”ハンドブック　一人ひとりに向き合い共に生きる社会をつくる』

※PDF版は、次のURLでダウンロードすることができます。
http://www.sal.design.kyushu-u.ac.jp/pdf/2018_handbook_Bunkacho_SAL.pdf

1 ハンドブック作成

2019年4月～2020年3月

2017年度より文化庁と大学・研究機関等の共同研究事業「文化芸術による社会包摂の在り方」と連動し、社会包摂につながる芸術活動に関する調査研究を行っています。3年目となる2019年度は、社会包摂につながる芸術活動の「評価」をテーマに、異なる立場で文化事業に携わる関係者18名へのインタビュー調査、年間7回の共同研究会（非公開）や2度の公開研究会を実施し、得られた内容を基にハンドブックを作成しました。多様な立場で事業に関わる人どうしが、事業の目的を共有し、事業改善や発展に向けて評価を活用していくためのヒントをまとめました。

タイトル

文化庁×九州大学共同研究チーム 編
『評価からみる“社会包摂×文化芸術”ハンドブック
一人ひとりの課題にせまり　社会に新しい価値観をつくる』

主な対象

- 文化行政に携わっている人
- 公共政策に関わりながら芸術活動を行っている人
- 共生社会の実現に広く関心のある人

構成

第1章 社会包摂につながる文化事業の評価とは
（背景知識、考え方、取り組む際の要点など）
第2章 評価をはじめる前に
（評価を行うはじめの一歩に必要な情報など）
第3章 現場から学ぶ評価の知恵
（全国で行われる先駆的な評価設計の事例紹介）
第4章 評価をとおしたコミュニケーション
（評価をいかし事業を改善・発展させるコミュニケーションのポイント）
ほか

■仕様
A5版、74ページ（イラストつき）
■編集協力
編集：NPO法人ドネルモ
デザイン：長末 香織
※ハンドブックのPDF版は、次のURLでダウンロードすることができます。
http://www.sal.design.kyushu-u.ac.jp/publications.html

作業プロセス

4月～9月	国内や海外（イギリス・オーストラリアなど）の文化事業の評価に関する調査
	評価、または文化事業の評価の関係者に対するインタビュー調査（省庁自治体職員、事業実施団体、中間支援組織、評価や文化政策の専門家など13名にインタビュー）
9月25日（水）	公開研究会にて調査内容の中間発表（1回目）
10月～2月	ハンドブック構成検討
	評価設計の先進事例に関するインタビュー調査（文化事業の評価専門家3名、心理学者1名、事業実施団体職員1名、医師1名にインタビュー）
12月21日（土）	公開研究会にて調査内容の中間発表（2回目）
12月～3月	ハンドブック作成（原稿執筆、デザイン、校正）
3月27日（金）	ハンドブック発行

研究会

5月9日（木）	第1回共同研究会
7月18日（木）	第2回共同研究会
9月18日（水）	第3回共同研究会
9月25日（水）	公開研究会（東京都）→次ページに詳細
10月15日（火）	第4回共同研究会
11月13日（水）	第5回共同研究会
12月21日（土）	公開研究会（埼玉県）→次ページに詳細
1月8日（水）	第6回共同研究会
2月3日（月）	第7回共同研究会

制作メンバー

〈文化庁〉
朝倉 由希（文化庁地域文化創生本部 総括・政策研究グループ研究官）
青柴 勝（文化庁地域文化創生本部 総括・政策研究グループ調査役）
永井 麗子（文化庁地域文化創生本部 総括・政策研究グループスタッフ）

〈九州大学ソーシャルアートラボ〉
中村 美亜（SAL教員）［研究代表者、第1章執筆担当］
長津 結一郎（SAL教員）［第2章執筆担当］
村谷 つかさ（SAL学術研究員）［第4章執筆担当］
藤原 旅人（SALスタッフ）

〈アドバイザー〉
大澤 寅雄（SALアドバイザー）
宮田 智史（NPO法人ドネルモ事務局長）［第3章執筆・編集担当］

〈事務局〉
櫻井 香那（NPO法人ドネルモスタッフ）［第3章執筆・編集担当］

公開研究会1　9月25日（水）

「文化事業の評価 現場×行政 それぞれの視点をつなぐ」

〈日本文化政策学会 会員企画提案制度「研究会」として開催〉

本研究会では、文化事業における評価のあり方について、実践現場や行政で行われている異なる段階の評価について、相互の関係性や接続の可能性に関し情報共有と問題提起を行い、再考を試みました。前半は、話題提供として3名のプレゼンテーションの内容を受け、ゲストのお二人よりコメントをいただきました。後半は、3名の話題提供者と2名のゲストが登壇し、会場からの声を交えながらディスカッションを行いました。

文化事業の評価に関し、生じている課題は必ずしも文化特有のものではないこと、アウトカム（事業を行うことで生じる成果・効果）をベースにしたプログラム設計が必要なこと、評価のプロセスは異なる立場で事業に関わる人どうしがコミュニケーションを取り共通言語を得る機会となることなど、テーマに関し多くの重要な視点について議論がなされました。

撮影：NPO法人ドネルモ

〈プレゼンテーション〉
「文化事業における評価の現状と課題」（大澤 寅雄）
「インタビュー調査から見えてきたこと」（村谷 つかさ）
「評価への向き合い方に関する提案」（中村 美亜）

〈ゲスト〉
片山 正夫（公益財団法人セゾン文化財団理事長）
源 由理子（明治大学公共政策大学院ガバナンス研究科教授）

〈モデレーター〉朝倉 由希

〈全体司会〉長津 結一郎

参加者：93名　**会場：**ワイム貸会議室 お茶の水（東京）
時間：15:00〜18:00（14:30開場）　**参加費：**無料
スタッフ：青柴 勝・永井 麗子・関 尚也（文化庁）、宮田 智史・櫻井 香那（NPO法人ドネルモスタッフ）
UDトーク：槇原 彩・石橋 鼓太郎・松尾 加奈（東京藝術大学大学院学生）
協力：文化庁地域文化創生本部、NPO法人ドネルモ
報告書は次のURLでダウンロードすることができます
http://www.sal.design.kyushu-u.ac.jp/pdf/190925koukaikenkyuukai.pdf

公開研究会2　12月21日（土）

「社会包摂につながる芸術活動についての評価」

〈日本文化政策学会 第13回研究大会「企画フォーラム」として開催〉

前半は、4名からの話題提供としてプレゼンテーションを行い、後半は参加者を交えてのディスカッションでした。

参加者からは、これまでの文化政策と評価との関係や、カタカナやアルファベット表記のものが多くわかりづらい評価手法などの言葉に関する理解がすすんだという声をいただきました。また、評価を通し、ステークホルダー間のコミュニケーションを促すことで活動の目標などを共有することが大切である点、作品や活動の新たな価値や価値基準を生み出す可能性がある点、評価結果をアドボカシーにつなげることが大事である点などへの気づきが得られたという声がありました。通常の「文化事業の評価」と「社会包摂につながる文化事業の評価」との違いなどについては、もっと具体的な議論を行う必要性についてのご指摘をいただきました。

参加者：62名　**会場：**さいたま市文化センター　**時間：**13:00〜15:00
参加費：無料　**スタッフ：**藤原 旅人（SALスタッフ）

〈プレゼンテーション〉
「文化政策と評価再考：データ主義の流れの中で」（朝倉 由希）
「近年のNPOセクターにおける評価の動向とその影響」（宮田 智史）
「文化事業の評価と社会包摂につながる芸術活動」（中村 美亜）
「社会包摂を意識した芸術活動を評価するための視点の整理」（長津 結一郎）

〈モデレーター〉大澤 寅雄

〈全体司会〉村谷 つかさ

essay

ネバーエンディングな「評価」をめぐる旅

文：宮田 智史（NPO法人ドネルモ事務局長）

評価は、基本的に、ある目的を達成するための道具（ツール）です。したがって、さまざまな手法があり、シチュエーションに応じた活用法があります。そして、道具であるからこそ、その目的に即した、最適なチョイスと使用法の熟知が大切になります。たとえば、冬山を登る際、天候悪化が見込まれるのに低山だからといって6本爪のアイゼンを装着したり、ピッケルによる滑落停止の練習を疎かにしていたりすると、怪我や遭難のリスクが生じてしまいます。目的や状況を考えず闇雲に道具を使うと痛い目に合う。評価もまたしかりです。

この文化庁と九州大学の「文化芸術による社会包摂のあり方」に関する共同研究も3年目を迎えます。昨年度作成したハンドブックは、「社会包摂につながる芸術活動とは何か、どのような価値を持つのか」というテーマでした。今年度は当初よりそうした芸術活動の評価を扱うことが決まっており、4月より研究会のメンバーと何度も内容の検討を重ねてきました。ただ、年々、評価に関する動きが騒がしくなり、「評価は道具」ということが強調されないまま、近視眼的な議論があちこちで目立つ現状を感じていました。そのため、今回のハンドブックでは、何のために評価をするのか、評価をどう活用するのかといった“そもそも論”に立ち返ることを強く意識した内容になっています。というのも、読者の皆さんに、何のために自分たちは評価をするのか立ち止まって改めて考えてもらいたかったからです。

Evaluation、Assessment、Measurement、Ratingなど「評価」と翻訳されることがある英語は実にさまざまで、それぞれ意味やニュアンスが異なるにも関わらず、同じように「評価」として訳され、使用されていることがあります。そうした意味で、まだまだ私たちには、社会包摂につながる芸術活動の評価の前に、評価自体の議論の蓄積が不十分なのだといえます。道具としての評価の理解を進めると同時に、何のために評価をするのか、その先に何を求めるのか、今後の読者の皆さんの思考のきっかけになれば幸いです。

宮田 智史（みやた さとし）
1984年福岡生まれ。2006年より文化芸術活動をウェブ上で批評するドネルモ（フランス語で「言葉を与える」）の企画・運営に携わる。2012年に、「自分たちの暮らしを自分たちでつくる」文化的な社会を目指して、高齢社会のコミュニティづくりに取り組むNPO法人ドネルモを設立。

essay

改めて「人材育成」について考える

文：大澤 寅雄（SALアドバイザー）

私が文化政策やアートマネジメントに関わる仕事をしはじめてから四半世紀になりますが、この領域で「人材不足」が課題とされる状況は変わっていません。ただ、人材を必要とする現場や求められる人材像は、少なからず変化しています。かつて全国各地にホール、劇場、美術館などの文化施設が相次いで設置された1990年代は、公演や展覧会を「プロデュース」する人材の育成が必要とされました。今もそうした人材は必要ですが、近年はむしろ芸術と社会の関わりを「コーディネート」する人材が必要とされています。SALが取り組んできたのは、地域とアートとの狭間で調整や翻訳をし、異なる立場の人やグループの協働を促し効果的に働けるようにする、まさにコーディネーターの人材育成です。

今年度はSALのメンバーで、こうした人材に求められる資質（マインド）と技能（スキル）について継続的に議論しましたが、その中で私に根本的な問いが生まれました。果たして「個人」に資質や技能が蓄積されることが必要なのだろうか、ということです。SALがテーマとしている「社会包摂に資する共創的芸術活動のデザイン」では、特定の個人によって企画を主導、牽引、統率するものではなく、異なる立場の人や集団との「共創」が重要であり、だからこそ「プロデューサー」よりも「コーディネーター」が必要なのです。そのために必要とされる資質や技能を、個々人が習得できるようにメニュー化し、プログラムやカリキュラムに落とし込むことが人材育成につながるものだと私自身も想像していました。ところが「社会包摂に資する共創的芸術活動」の実践を通じて感じるのは、共創的な芸術活動は、優れた資質や技能を持つ特定の個人がいれば活動が成立するわけではなく、その協働に参加する一人ひとりが、求められる資質や技能を補完し合い、高め合う有効な関係こそが重要なのです。つまり、個人が資質や技能を蓄積して周囲を管理し統率するのではなく、集団の参加者の各々から資質や技能を引き出し、自発性を促すことが重要だということです。

だとすると、そのためにはどのような人材育成が必要なのでしょうか。この点を私は2020年度のSALでも問い続けながら、手ごたえのある人材育成のカタチを見つけたいと思っています。

大澤 寅雄（おおさわ とらお）
（株）ニッセイ基礎研究所芸術文化プロジェクト室主任研究員、九州大学ソーシャルアートラボ・アドバイザー。共著に『これからのアートマネジメント“ソーシャル・シェア”への道』『文化からの復興 市民と震災といわきアリオスと』『ソーシャルアートラボ 地域と社会をひらく』。

② 人材育成モデル検討会〈全9回〉

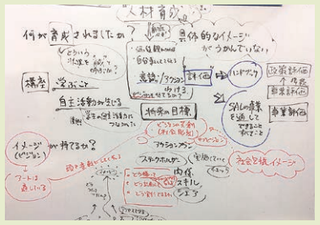
2019年4月～2020年3月

SALでは、2018年度より「アート活動を通した“共に生きる社会”の創造」をテーマとし、実践や調査研究で得られたことを社会資源化することや、社会包摂につながる芸術活動を推進するアートマネジメント人材を育成することを目的に掲げています。その目的達成に向けて、今年度は「人材育成モデル検討会」を全9回開き、必要な情報の整理や概念の構築を、SALの教員・スタッフ全員で行いました。

通常使われている「アートマネジメント」と「社会包摂につながる芸術活動のアートマネジメント」にはどのような違いがあるのか。SALがイメージする「アートマネジメント人材」像とはどのようなものか。アートマネジメント「人材育成」とは、何が育まれたことをもって、育成されたといえるのか。また、人材育成のプログラムとはどのようなものなのか。これらの点について、これまでSALが培った経験を紡ぎ、徐々に言語化を進めています。そして暫定的にですが、「アートマネジメントに必要な7つの視点」をまとめました。次年度は、これまでに得られた視点を活用した実践プログラムを試行・検証するとともに、さらに情報の整理や概念構築を進めていく予定です。

会議の内容

第1回　4月9日（火）
▶「アートマネジメント」や「人材育成」について、まずはざっくばらんに話し合い。



第1回検討会で、会議を行った際のホワイトボード

第2回　5月14日（火）
▶SALが考える「アートマネジメント人材」像を言葉にする必要性について。

3つの実践講座におけるSALと協働団体との関係性の違いを整理

第3回　7月17日（水）
▶「アートマネジメント」や「人材育成」について、言葉で表現してみる。▶共通認識がだいぶ持ててくる。

第4回　8月21日（水）
▶「アートマネジメント」に必要な技能（育成すべきこと）という視点で考えて、言葉にしてみる。▶アートが果たす役割についても考えてみる。

第5回　10月4日（金）
▶「アートマネジメントに必要な力」の原案をまとめる。▶マネジメントのスキル（運用力）の育成よりも、新しい価値を創出する活動を展開できる力の育成に着目する。

第6回　11月15日（金）
▶「アートマネジメントに必要な力」を育むプログラムを、「どういう人を対象として」「どういう結果を生むのか」という流れの中で整理してみる。

第7回　12月17日（火）
▶「アートマネジメントに必要な力」をさらにシンプルな文章にまとめる。▶「必要な力」とすると個人が持つべき力に見える。▶個人だけではなく、チームとして力が備わることも大事ではないか。

第8回　2020年1月17日（金）
▶「アートマネジメントに必要な力」を「アートマネジメントに必要な視点」に変更。▶各「視点」を、各実践講座にあてはめて整理してみる。

第8回検討会の様子

2月8日（土）
公開ディスカッション開催
「【暫定版】アートマネジメントに必要な7つの視点」を軸に、各実践講座の内容を整理し発表。参加者からのフィードバックを得た。→右ページ参照

第9回　3月10日（火）
▶公開ディスカッションでのフィードバックも含めて情報を整理。▶次年度のプログラム構築に生かすため、課題や要点を整理。

2020年度 プログラム試行へ

③ 公開ディスカッション
アート活動を通した共生社会の創造vol.2 マネジメントに必要な力を考える

2月8日（土）

社会包摂につながる芸術活動のアートマネジメントに必要な視点は何か？というテーマに対し、SALがこれまでの経験を紡いで提案する「【暫定版】アートマネジメントに必要な7つの視点」を軸に、公開で議論する場を開きました。今年度、SALが実施した事業の関係者が一堂に会し各成果を発表するとともに、参加者を交えて本テーマの課題や要点について考え、語り合いました。前半はSAL教員・スタッフより、実施した調査研究や実践講座の概要を「7つの視点」に沿って説明し、実践講座に関しては、各講座の協働団体の方からもコメントをいただきました。続くワークショップを経て、後半は、参加者から集めた話題を基に、会場からのコメントや質問を交えながら議論を行いました。

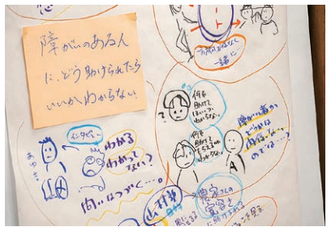
本会では、「障害のある人との舞台表現を行うために必要なことは、特別なリスクマネジメントよりも、まずは人として互いに知り合うことである」「被災地に地域外の人が、自分ごととして関われる仕掛けをつくることで、『関係人口』を増やすことが大切である」など、活動を行う際に大切と思われる点が共有されました。また、会場からは「アートによるコミュニケーションで何が生まれる？」「アートマネジメントって、いったい何？」などの話題が寄せられました。今回、議論された多様な視点について、今後さらに深めていけるよう、次年度の事業計画に活かしていきます。

登壇者

〈今年度事業の協働団体〉
森山 淳子（認定NPO法人 ニコちゃんの会）
尾藤 悦子・柳 和暢（共星の里）
黄 柏瑋（特例認定NPO法人 山村塾）
宮田 智史（NPO法人ドネルモ）

〈九州大学ソーシャルアートラボ（SAL）〉
尾本 章（SAL教員）
中村 美亜（SAL教員）
知足 美加子（SAL教員）
朝廣 和夫（SAL教員）
長津 結一郎（SAL教員）
村谷 つかさ（SAL 学術研究員）
白水 祐樹（SALスタッフ）
眞﨑 一美（SALスタッフ）
藤原 旅人（SALスタッフ）
大澤 寅雄（SALアドバイザー）

参加者：29名
会場：九州大学大橋キャンパス 7号館1階 ワークショップルーム
時間：14:00～17:00　**参加費：**無料
スタッフ：山本 哲子（SALスタッフ）
UDトークスタッフ：川上 里以菜・福田 望・伊藤 涼（九州大学学生）



撮影（このページすべて）：長野 聡史

コミュニケーションという接点からみえるもの

村谷 つかさ（SAL学術研究員）

今年度、教材開発として行った3つの活動は、調査研究がベースなので主に頭を使って理論化するという、いわゆるお硬い内容です。そこでみえてきたことは、How to的な方法論というよりも、人と人、人と地域などの間に生じる相互作用を大切にした、柔軟なコミュニケーションのあり方に関することでした。ここでは、活動を通してみえてきたアートマネジメントに欠かせないコミュニケーションのあり方について、内容を丁寧に見つめてみたいと思います。

今年度出版したハンドブックは、社会包摂につながる芸術活動の「評価」がテーマでした。評価と聞くと、決まったものさしで良し悪しをはかる「査定」のイメージを持つ人も多いと思います。しかし、関連分野の専門家の皆さんにお話を聞く中で繰り返し出てきた内容は、評価の手法に関することよりも、評価を通して行政の担当職員や事業実施団体をはじめとする関係者がコミュニケーションを取ることの大切さでした。つまり、アプローチする課題のある状況、その課題に対する事業の目的や実現したい目標について対話を重ね言語化する過程を、異なる立場で関わる人の間で共有し協働して事業を実施・改善・発展させる時に、評価は共通言語として役立つというのです。（詳しくは、ハンドブックを是非ご覧いただきたいと思います）

このようなコミュニケーションを成り立たせる前提として、行政と事業実施団体の関係が対等でありながら、それぞれが異なる役割を果たすという意識が必要だといえます。お金を持っている方が偉いという考え方ではありません。また、指標をつくりデータを収集・分析することで得られた結果（数値・質的）を、届けたい人にどのように届けるのかということも大切になります。評価による結果は、届けたい誰かに、伝わるようなかたちにして手渡すものと考えると、意味あるものに思えるのではないでしょうか。このような評価に対するマインドセットを、具体的な方法論に走る前に関係者間で持つためにハンドブックが役立つことを願っています。

人材育成モデル検討会は、まさにSAL内部でのコミュニケーションの場であったといえるでしょう。SALの構成員は、異なる専門性や活動領域を持つため「アート」や「アートマネジメント」という言葉に対してもみえているものが異なっていました。だからこそ多方面からの視野による議論となり、その中で丁寧に語り合うことでお互いにみているものを擦り合わせていきました。これは昨年度からの事業テーマである「アートと社会包摂」に対し、SALの構成員全員が対話によってヴィジョンをつくり共有する過程といえ、組織としての力を高める役割も果たしていると考えています。

SALでは年間を通し、結構な数の事業を行うので運営だけでも大変なのですが、事業によって得られた経験値をどのように紡いでいけるのかは更に課題といえます。検討会において毎回白熱した議論を行い、次回までに内容を整理し、次の方向性がみえるようにまとめるということを1年間繰り返した結果、SALが考える「アートマネジメント人材育成に必要な7つの視点」を、暫定的に整理することができています。これらの視点を軸に、異なる特徴を持つ各実践講座の内容を整理していくことで、全講座に共通した要点や課題に加え、講座ごとの特徴も示せるようになることが期待できます。

検討会の内容をふまえ開催した公開ディスカッションでは、「これだけいろいろな事業をしていて、横串がささっているというのがすごいですね」という言葉を、参加者からいただけました。これは大変嬉しい感想で、まさに、人材育成モデル検討会を通して目指していたことでした。

コミュニケーションは、両者が同じ方法で行って成り立つ場合と、成り立たない場合があると思います。これは私が、長らく重度の知的障害のある人と創作活動をしてきた経験から感じたことです。言葉での意思疎通が難しい知的障害のある人と関わる時には、まず私自身の存在を相手に認識してもらう必要がありました。そのためには、相手に理解してもらえるようなかたちでの働きかけが必要になります。一緒に過ごす時間の積み重ねであったり楽しい時間の共有であったり、記号としての言葉を超えた、信頼関係に基づく心と心の対話が必要だったように思います。

社会包摂につながる芸術活動という、支援する側／される側というような不平等な関係性が生じやすい中で、アートマネジメントを行うためにまず必要なことは、多様な関係者と多様なかたちでの対話を通し、理想とするヴィジョンを創ることでしょう。しかし、理想と現実の間にはギャップがあります。その間をつなぐとき、アートによる視点はどのような可能性を持つのでしょうか。次年度は、その仕掛けとしてのアートマネジメントのあり方を多角的に捉えて、皆さんと共に考え実践・検証して行きたいと思います。

2019年度事業フライヤー一覧

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

実践講座

〈九州北部豪雨災害復興支援プロジェクト〉

1 九州北部豪雨災害復興支援　風と水と土の道・再生のための庭づくりワークショップ vol. 1「黒川復興ガーデンとバイオアート―英彦山修験道と禅に習う―」　参加者募集

2 九州北部豪雨災害復興支援　風と水と土の道・再生のための庭づくりワークショップ vol. 2「黒川復興ガーデンとバイオアート―英彦山修験道と禅に習う―　東屋セルフビルドと植栽ワークショップ」　参加者募集

〈「演劇と社会包摂」制作実践講座〉

3 身体表現ワークショップ「障害からひろがる表現とケア」　参加者募集

4 フォーラム「障害からひろがる表現とケア ともに創造するためのはじめの一歩」

〈奥八女芸農プロジェクト〉

5 撮り、踊り、田に入る。言葉を見つける3日間「奥八女芸農学校」　受講生募集中！

6 シンポジウム「アート×農」を通じて地域づくりを考える

7 現代に《民俗芸能》をつくる in 笠原「八女茶山おどり発表会」

公開講座

8 「人と人との境界を問う――ダムタイプ《S/N》上映&トーク」

9 「アートで豊かになる団地」

10 「生きるための音楽『アリラン峠を越えていく』上映会&トーク」

教材開発

11 文化庁×九州大学「文化芸術による社会包摂の在り方」公開研究会「文化事業の評価 現場×行政 それぞれの視点をつなぐ」

12 公開ディスカッション「アート活動を通した共生社会の創造 vol.2」マネジメントに必要な力を考える

フライヤーデザイン
1、2、10、12＝田中 里佳
3、4＝舘 紗也子（superlap, inc.）
5、8、9、11＝西田 優子（遊覧船グラフィック）
6、7＝SAL

メディア掲載

2019年6月28日
九州、山口エリアの展覧会情報＆アートカルチャーWEBマガジン ARTNE
※「演劇と社会包摂」制作実践講座

2019年7月1日
福岡市政だより7月1日号
情報BOX
※「演劇と社会包摂」制作実践講座

2019年7月2日
日本経済新聞　夕刊❶
流木・土砂 再生の礎に
※九州北部豪雨災害復興支援プロジェクト

2019年7月9日
西日本新聞　朝刊❷
芸術を通して共生社会へ
※教材開発

2019年7月11日
日本経済新聞　夕刊
「命を守る」芽吹く意識
※九州北部豪雨災害復興支援プロジェクト

2019年7月15日
月刊地方自治職員研修　通巻724号
※教材開発

2019年8月1日
広報八女　8月1日号
お知らせ
※奥八女芸農プロジェクト

2019年8月15日
広報八女　8月15日号
お知らせ
※奥八女芸農プロジェクト

2019年8月21日
日本経済新聞　夕刊❸
九州北部豪雨広がれ支援の輪
※九州北部豪雨災害復興支援プロジェクト

2019年8月29日
朝日新聞　朝刊❹
「復興ガーデン」つくろう
※九州北部豪雨災害復興支援プロジェクト

2019年8月30日
西日本新聞　朝刊
豪雨の記憶伝えるアート
※九州北部豪雨災害復興支援プロジェクト

2019年9月9日
FM八女　がまだすワイド
山村塾だより　奥八女芸農学校について
※奥八女芸農プロジェクト

2019年9月30日
FM八女　がまだすワイド
山村塾だより　奥八女芸農プロジェクトについて
※奥八女芸農プロジェクト

2019年10月1日
朝日新聞　朝刊❺
豪雨被災地の奮闘 冊子に
※九州北部豪雨災害復興支援プロジェクト

2019年10月1日　［記事6］
Museum & TripMagazine muto
muTOPIC.02/exhibition
※公開講座

2019年10月1日
福岡市政だより　10月1日号
情報BOX
※公開講座

2019年10月3日
西日本新聞　朝刊
ちぐごガイド
※奥八女芸農プロジェクト

2019年11月7日
毎日新聞　朝刊
復興支援団体紹介
※九州北部豪雨災害復興支援プロジェクト

2019年11月15日
福岡市政だより　11月15日号
情報BOX
※公開講座

2019年12月15日
福岡市政だより　12月15日号
情報BOX
※公開講座

2020年1月9日
毎日新聞　朝刊
福岡 ぷらり★
出かけよう
※公開講座

2020年2月20日
毎日新聞　朝刊
被災した木であずまや作り
※九州北部豪雨災害復興支援プロジェクト

豪雨で岩が流れ着いた「共星の里」の庭。ここを「復興ガーデン」にする＝2018年7月1日

「復興ガーデン」つくろう

朝倉で九大ラボ、参加者募集

九州北部豪雨で被災したのある人にはぜひ来てほしい。特に若い方は歓迎」と呼びかける。

11日は午後1～4時半、12日は午前10時半～午後4時半。4日締め切りで、先着20人。参加無料。西鉄筑紫駅や道の駅「三連水車の里あさくら」からの送迎もある。

問い合わせはソーシャルアートラボ（092・555・3・4052、sal-out@ut.ac.jp）。

2019年（令和元年）8月21日（水曜日）

九州北部豪雨 広がれ支援の輪

団体紹介冊子 学生ら来月発行

「思い・活動 知って行動を」

発行前に冊子をチェックするメンバーら（福岡市）

流木の95%、10.7万トン撤去 福岡県内

芸術を通して共生社会へ

活動の手引を刊行

社会的に排除され孤立がちなマイノリティーの人たちとの芸術活動を通じ、豊かさを認め支える「共生社会」を実現しようと、九州大学芸術工学研究院と文化庁は「はじめての社会包摂×文化芸術ハンドブック」を刊行した。近年、マイノリティーを巻き込む芸術活動が相次ぐが、どう取り組めばよいか分からないとの声があることなどから、同研究院の中村美亜准教授を中心に昨年1月から作成に着手、先行例の実践者5名に話を聞いて手引書にまとめた。

ガイドブックでは冒頭、「社会包摂につながる芸術活動について、マイノリティーの人たちの自己肯定感を高めるとともにマンネリティー（多数派）の意識を変える芸術活動」と説明。実践に当たり重要なポイントとして、①両者が対話する機会をつくる②創造性や特徴にも表現を探り、計画変更をいとわない③集・学・上海のやり方を一方とすることを挙げる。

先行例として、障害者の芸術・舞台芸術活動を支援するNPO法人「まる」（福岡市博多）や、ホームレスや日雇い労働者ら市民講座を開くNPO法人「コミュニム」（大阪市）など多様なプログラムで、日雇い労働者やホームレスらを支援する。代表で詩人の上田假奈代さんらアーティストが、各人が表現したいことは何か、時間をかけて対話し見いだしていく。

滋賀県の障害者支援施設「やまなみ工房」には、ひたすら毎日、インスタントラーメンを袋の上から押して、くぼみを付ける人がいた。それ以外のことには興味を示さない。なるほど、驚くとはみを付けた袋を作品にして大量に並べて眺めた。その行為を自己ゆっているのだ、と分かると何か心を打たれる。美術専門誌も取り上げた。

芸術の長さは、社会の常識的な価値基準とは違うが、作品とともに打ち立てることができるところだ。例えば、福祉施設で時々熱れだす入ンデーションできないかを考える。暴れてもいい時間や空間をつくって、共同で作品をこねる時間を用意していく。一般的な成功からこぼれ落ちる人間の欲求を作り方をすくい取ることができるところに芸術の価値がある。

岐阜県の可児市文化創造センター「a-na（アーナ）」は外国人労働者と一緒に演劇をつくる取組をし、コミュニケーションや相互理解を深めた。言葉より身ぶりなど非言語表現の方が共通項を見いだしやすい。文化の違いの面白さを知り、異国で働く困難さを考える機会にもなる。

多様で異なる人々がお互いの気持ちを共有できる場を数多くつくることがこれから必要になる。芸術活動はその大切な力になる。

ハンドブックを中心となってまとめた中村美亜・九州大学芸術工学研究院准教授に「社会包摂と芸術」に込める思いを聞いた。

＊

1990年代頃から国内外で、移民や紛争地の住民、難民者、障害がある人、LGBT（性的少数者）など、生きづらさを抱えるマイノリティーが芸術活動で元気になったり、マイノリティーとマジョリティーが共に芸術活動を楽しみ、新しいコミュニティーが生まれたりする事例が報告されている。

障害のある人の芸術活動は活発だ。絵画では矩形と描かれた個じ形ではないが、なぜかに響いてくる。私たちが普段は抑制しがちな表現がそこにある。社会的には分断される関係でも、あ、なんか、分かる」と共感できることがあるのだ。

芸術活動は表現の権利とも関わる。大阪市のコミュニムが開く市民講座「釜ヶ崎芸術大学」は絵画、習字、演劇など多様なプログラムで、日雇い労働者やホームレスらを支援する。代表で詩人の上田假奈代さんらアーティストが、各人が表現したいことは何か、時間をかけて対話し見いだしていく。

滋賀県の障害者支援施設「やまなみ工房」には、ひたすら毎日、インスタントラーメンを袋の上から押して、くぼみを付ける人がいた。それ以外のことには興味を示さない。なるほど、驚くとはみを付けた袋を作品にして大量に並べて眺めた。その行為を自己ゆっているのだ、と分かると何か心を打たれる。美術専門誌も取り上げた。

芸術の長さは、社会の常識的な価値基準とは違うが、作品とともに打ち立てることができるところだ。例えば、福祉施設で時々熱れだす入ンデーションできないかを考える。暴れてもいい時間や空間をつくって、共同で作品をこねる時間を用意していく。一般的な成功からこぼれ落ちる人間の欲求を作り方をすくい取ることができるところに芸術の価値がある。

岐阜県の可児市文化創造センター「a-na（アーナ）」は外国人労働者と一緒に演劇をつくる取組をし、コミュニケーションや相互理解を深めた。言葉より身ぶりなど非言語表現の方が共通項を見いだしやすい。文化の違いの面白さを知り、異国で働く困難さを考える機会にもなる。

多様で異なる人々がお互いの気持ちを共有できる場を数多くつくることがこれから必要になる。芸術活動はその大切な力になる。

なかむら・みあ　1968年、名古屋市生まれ。専門は芸術社会学。東京芸大卒。同大助教などを経て2014年から現職。九州大ソーシャルアートラボ副ラボ長。著書に「音楽をひらく―アート・ケア・文化のトリロジー」など。

刊行したハンドブック

ホームレスや障害者 … マイノリティーとつなぐ

九州大と文化庁

阪市西成区）など五つの取り組みを紹介している。

中村准教授は「芸術は専門家のものでなく、誰もが楽しみ、生きる糧にできる。身体や五感を使う芸流は新たな気付きや理解を生んで、それぞれの社会問題を知る機会にもなる。芸術を通じ、多様な人々が違いを認め合い共生する社会を目指したいと話す。

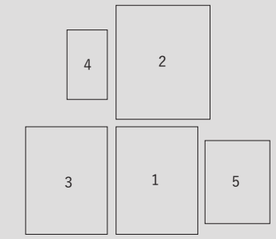
ハンドブックは冊子。同大ソーシャルアートラボのサイトからダウンロードできる。

（吉田昭一郎）

違う尺度で新しい価値を

「社会包摂と芸術」中村美亜准教授に聞く

発行前に冊子をチェックするメンバーら（福岡市）



1. 日本経済新聞　2019年7月2日夕刊
流木・土砂再生の礎に 九州北部豪雨2年
薪や培養土、収益を寄付
2. 西日本新聞　2019年7月9日朝刊
芸術を通して共生社会へ 活動の手引を刊行
違う尺度で新しい価値を
「社会包摂と芸術」中村美亜准教授に聞く
3. 日本経済新聞　2019年8月21日夕刊
九州北部豪雨広がれ支援の輪
団体紹介冊子 学生ら来月発行
「思い・活動 知って行動を」
4. 朝日新聞　2019年8月29日朝刊
「復興ガーデン」つくろう
朝倉で九大ラボ、参加者募集
5. 朝日新聞　2019年10月1日朝刊
豪雨被災地の奮闘 冊子に
九大准教授や学生ら 朝倉・東峰・添田で取材
復興に向け頑張る人つなぐ

2019年（令和元年）7月2日（火曜日）

九州北部豪雨 2年

流木・土砂 再生の礎に

薪や培養土、収益を寄付

九州北部豪雨で放置された流木や倒木からヒノキのチップを作る師岡知弘さん（福岡県朝倉市）

2019年（令和元年）10月1日（火）　14版　第22部図　22

まなびの現場

豪雨被災地の奮闘 冊子に

九大准教授や学生ら 朝倉・東峰・添田で取材

復興に向け頑張る人つなぐ

おわりに

九州大学ソーシャルアートラボ（SAL）の「アートと社会包摂」の2年目が終了しました。今年も、本当の多くの皆さまにお世話になり、実践講座、公開講座、教材開発と、幅広い活動に取り組ませていただきました。この冊子をご覧いただいて、そのバリエーションの豊かさはお分かりいただけるかと思います。昨年度出版したハンドブックや、今年度の成果である『かたり』がよく読まれ、使われているというお話や、SNSでの「いいね」の数などから、これまでのSALの成果が少しずつ社会に浸透しているのではないか、と実感する機会もいただけるようになってきました。これだけの事業を力強く推進しているスタッフ、教員の皆さんを心から誇りに思いますし、何よりお世話になっているご関係の皆さまに感謝申し上げる次第です。ありがとうございます。それと同時に、このような時だからこそ、これまでの取り組みで中途半端にご迷惑をおかけしていることはないかなど、もう一度謙虚に振り返り、息の長い活動のトータルの成果を評価していただけるように精進していきたいと思います。改めて、ご指導ご鞭撻いただきますようお願いいたします。

SALが属する芸術工学研究院においては、社会包摂を重要なキーワードと捉えて、幅広く学内外と協調できる教育研究活動に取り組もうとしています。私が関係する音の工学的な分野でも、得られるさまざまな成果を、人の福祉に直接的、間接的に活用することを強く意識して、音響福祉工学と呼べる分野の確立を目指そうと考えています。工学が社会包摂にどのように貢献できるかをデザインする、芸術工学ならではの試みです。もちろんラボの活動とも有機的に連携し、次年度以降の報告書の中で、一節でも貢献できるようになればと考えています。工学分野の研究は、とかく視野が狭まりがちです。SALの活動でお世話になっている皆さまからの、幅広いご意見で、道を広げ、進むべき方向に明かりを灯していただければと考えています。引き続き、よろしくお願い申し上げます。

尾本 章（SAL教員・ラボ長）

九州大学ソーシャルアートラボ

ラボ長

尾本 章（コミュニケーションデザイン科学部門 教授、応用音響工学）

人材育成グループ

［構成教員］

中村 美亜（コミュニケーションデザイン科学部門 准教授、芸術社会学）〈グループ長、副ラボ長〉

尾本 章（コミュニケーションデザイン科学部門 教授、応用音響工学）

知足 美加子（コンテンツ・クリエーティブデザイン部門 教授、彫刻）

朝廣 和夫（環境デザイン部門 准教授、緑地保全学）

長津 結一郎（コミュニケーションデザイン科学部門 助教、アートマネジメント）

［事務局スタッフ］

村谷 つかさ（学術研究員）

白水 祐樹（テクニカルスタッフ）

藤原 旅人（テクニカルスタッフ）

眞﨑 一美（テクニカルスタッフ）

椙山 尚子（事務補佐員）※2019年8月まで

山本 哲子（事務補佐員）※2019年11月から

［アドバイザー］

大澤 寅雄（ニッセイ基礎研究所 芸術文化プロジェクト室 主任研究員）

事業助成

2019年度 文化庁 大学における文化芸術推進事業

事業共催

公益財団法人福岡市文化芸術振興財団

共星の里

特例認定NPO法人山村塾

NPO法人ドネルモ

認定NPO法人ニコちゃんの会

事業後援

日本アートマネジメント学会九州部会

アート活動を通した“共に生きる社会”の創造 2
九州大学ソーシャルアートラボ アートマネジメント人材育成事業
2019年度 活動報告書

2020年3月25日発行

編集　木下 貴子（CXB）、長津 結一郎、村谷 つかさ
執筆　朝廣 和夫、大澤 寅雄、尾本 章、小森 耕太、白水 祐樹、武田 力、谷 正和、知足 美加子、中村 美亜、長津 結一郎、永松 美和、藤原 旅人、眞﨑 一美、町野 陽子、密岡 稜大、宮田 智史、村谷 つかさ、森山 淳子、吉野 さつき
写真　兼子 裕代、富永 亜紀子、長野 聡史、i-dArt、特例認定NPO法人山村塾、NPO法人ドネルモ、認定NPO法人ニコちゃんの会、九州大学大学院芸術工学研究院ソーシャルアートラボ
デザイン　大村 政之（図案考案クルール）
発行　九州大学大学院芸術工学研究院附属ソーシャルアートラボ
〒815-8540 福岡県福岡市南区塩原4-9-1
九州大学大橋キャンパス ソーシャルアートラボ事務局
TEL&FAX: 092-553-4552
E-mail: sal-cul@design.kyushu-u-ac.jp
URL: http://www.sal.design.kyushu-u.ac.jp
印刷所　正光印刷株式会社

©2020 九州大学ソーシャルアートラボ

SOCIAL ART LAB
FACULTY OF DESIGN
KYUSHU UNIVERSITY

九州大学
KYUSHU UNIVERSITY

九州大学

大学院芸術工学研究院
大学院芸術工学府
芸術工学部

Faculty of Design
Graduate School of Design
School of Design
Kyushu University

文化庁
Agency for Cultural Affairs, Government of Japan

大学から
文化力
POWER OF CULTURE